NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要

niwa 邇波

2020
第 7 号

令和元年度
活動記録

NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要 第７号

niwa 邇波

目次

令和元年度活動記録

青塚古墳史跡公園 ･････････････････1
木之下城伝承館・堀部邸 ･････････････2
歴史の里・しだみ古墳群 ･････････････3
その他ニワ里ねっと自主事業 ････････4
その他文化遺産関連受託事業 ････････5
活動年表 ･･････････････････････････6

研究論考

東之宮古墳に観る二集団と東海六部族
赤塚次郎 ･･････････････････････････ 8

資料紹介

犬山市・宮裏池採集の灰釉陶器について
大塚友恵 ･･････････････････････････21

下流地域における「入鹿切れ」
供養塔・供養地蔵について
近藤健一 ･･････････････････････････26

歴史探訪

西南戦争で戦死した仙石庄之助（栗栖村出身）
の足跡を訪ねて
服部哲也 ･･････････････････････････30

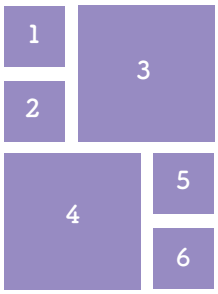
会員募集 ･･････････････････････････36

青塚古墳史跡公園

管理・運営業務を犬山市より委託を受け実施。「青塚古墳を見守る会」では、地元を中心に多くの方にご協力いただき、古墳の草刈りを行いました。第10回目となる青塚古墳まつりは1000名を越える来場者で賑わいました。城東地区の文化遺産をテーマにした企画展を開催し、関連したまほら講座には多くの市民の方にご参加いただきました。

1. 青塚古墳まつり　2. 青塚子ども教室　3. 邇波史楽座「青塚の作り石第２の巻」　4. ニワ里カレッジ
5. 企画展「地域に眠る文化遺産 in 城東」　6. 青塚古墳を守る会・草刈り活動

木之下城伝承館・堀部邸



春・秋の特別展では、中野耕司氏の写真で切り取る犬山の風景を展示。関連して月津塾では、「犬山たび」に掲載した文化遺産の写真を語る会を開催し、その魅力を楽しみました。琥珀ペンダントや小型鏡、鏡チョコレート作りなどワークショップも充実。堀部邸の雰囲気を活かして落語や講談を楽しむ猪之子座には多くの方に来場いただきました。

1. 琥珀ペンダント作り　2. 特別展「犬山百花繚乱」　3. 猪之子座「上方落語 九雀亭」　4. 月津塾「犬山たび＊お祭り編」　5. 月津塾「自分で作る小型鏡ワークショップ」　6. 東之宮古墳鏡チョコレート作り

歴史の里・しだみ古墳群

平成31年4月から史跡公園としてオープンした「歴史の里・しだみ古墳群」。「体感！しだみ古墳群ミュージアム（しだみゅー）」と合わせて、指定管理者（しだみの里守グループ）の一員として参加がスタートしました。シンポジウムをはじめ、各月で開催した歴史講座やワークショップ、音楽祭など、どのイベントにも多くの方にご参加いただき大盛況でした。

1. 夜の音楽会 in しだみ古墳群「天空のテノール」　2. 歴史講演会「鈴鏡から文化を視る」　3. しだみゅー寄席
4. 現地案内風景　5. 歴史講座「お庭に埴輪プロジェクト」　6. シンポジウム「志段味大塚古墳の鈴が鳴る」

その他 ニワ里ねっと自主事業

バスツアーは飛鳥・葛城や御嵩町へ出向き、特別展を観覧したり、少しマニアックな古墳たびを会員の皆さんと楽しみました。岐阜市や一宮市の文化遺産を訪ねる散策会を実施、会員企画では文化遺産を自転車で巡るニワ里サイクリングも２回催しました。栗栖プロジェクトでは継続して試掘調査を行い、地域の皆さんにもお手伝いいただきました。

1. ウォーキング「象の歩いた美濃路を歩く」　2. 栗栖地区 試掘調査　3. ウォーキング「瑞龍寺山頂墳」
4. バスツアー「御嵩町の古墳たび」　5. 栗栖小歴史学習　6. サイクリング「春の尾張平野の国分寺跡をめぐる」

その他 文化遺産関連受託事業

ニワ里ねっとの活動分野を活かし、養老町・大垣市・尾張旭市・犬山市・春日井市・富加町・坂祝町・美濃加茂市などの市町村、岐阜大学などから委託を受け、講演会・散策会・企画展示など様々な事業を展開しました。また、文化遺産カードもv.弐カードを新たに発行し、各地でたくさんの方に楽しんでいただいています。

1.【大垣市】大垣城下町巡検　2.【養老町】養老町歴史講座　3.【犬山市】東之宮古墳散策ツアー　4.【大垣市】東町田墳丘墓講演会　5.【富加・坂祝・美濃加茂市町】学校歴史講談　6.【尾張旭市】民具企画展

6日：堀部邸特別展・展示解説
①中野耕司（ニワ里） ②堀部邸

12日～令和2年9月30日:【尾張旭市】「あさひの暮らしを支えた農作物」
②スカイワードあさひ歴史民俗フロア

14日：邇波史楽座「青塚の作り石 第2の巻」
①古代演劇集団「夢舞台」②青塚古墳 ③70名

16日：堀部邸歴史文化会「稲木神社補講」
①在野一生（ニワ里） ②堀部邸 ③10名

19日：月津塾「犬山たび＊お祭り編」
①広瀬まり（語り）ほか ②堀部邸 ③25名

19日：古墳よ jazz を聴け！
②青塚古墳史跡公園

20日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「岩場古墳」
①三田敦司（西尾市教委）②しだみゅー ③60名

26日：ニワ里バスツアー「御嵩町の古墳たび」
①赤塚次郎 ②御嵩町周辺 ③21名

27日：犬山総合防災パネル出展「入鹿切れ」
②犬山市立東小学校

11月

2日：ニワ里ウォーキング「象の歩いた美濃路を歩く」
①ニワ里スタッフ ②刈安賀～尾西歴民資料館 ③5名

4日：ニワ里サイクリング 「長久手古戦場を駆ける」
①古川博昭 ②長久手郷土資料館 ③8名

4日：月津塾「犬山たび＊街道編」
①広瀬まり（語り）ほか ②堀部邸

9日：【春日井市】「古墳消しゴムを作ろう」
①ニワ里ねっとスタッフ ②春日井市中央公民館 ③30名

10日：【名古屋市】しだみゅー秋まつり
②しだみゅー

10日：犬山市子連主催イベント・古墳消しゴムブース出展
②犬山市南部公民館 ③120名

16日：【大垣市】大垣城下町巡検
①旭堂南海（講談師）②大垣城周辺 ③26名

16日：【大垣市】歴史講談
①旭堂南海（講談師）②奥の細道むすびの地記念館 ③60名

17日：猪之子座「旭堂南海の上方講談をたっぷり5」
①旭堂南海（講談師） ②堀部邸 ③20名

20日：堀部邸歴史文化会「かみつけの国古墳めぐり②」
①伊藤宏樹 ②堀部邸 ③12名

21・22日：【富加町・坂祝町・美濃加茂市】学校講談
①旭堂南海（講談師） ②各市町村小学校

23日：【富加町・坂祝町・美濃加茂市】歴史講談「猿ばみの春」
①旭堂南海（講談師） ②坂祝町中央公民館 ③120名

23・24日：【大垣市】東町田墳丘墓講演会・写真展・散策
①赤塚次郎（ニワ里）ほか ②青墓地区センター

24日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「宝塚古墳群」
①和氣清章（松阪市教委） ②しだみゅー ③74名

30日：猪之子座 「犬山音頭の作曲家を訪ねて」
①長江希代子（ソプラノ）ほか ②堀部邸 ③54名

12月

1日：【名古屋市】しだみゅー寄席「旭堂南海・鱗林兄妹会」
①旭堂南海・旭堂鱗林（講談師） ②しだみゅー ③39名

4日～令和2年3月22日：【犬山市】企画展「地域に眠る文化遺産 in 城東」
②青塚古墳

7日：ニワ里カレッジ「下原のはにわ」
①浅田博造（春日井市教委）②青塚古墳 ③21名

7・8日：あいちの考古学ポスター発表
①大塚友恵（ニワ里）②名古屋市博物館

8日：月津塾「鈴鏡を鋳込む 公開実験その2」
②堀部邸 ③15名

14日：【名古屋市】しだみゅーバスツアー「西美濃の古墳たび」
①赤塚次郎（ニワ里） ②大垣市ほか ③30名

15日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会特別企画「纒向型前方後円墳と東海地域」
①寺澤 薫（纒向学研究センター）ほか ②高蔵寺ふれあいセンター ③139名

21日：ニワ里カレッジ「下原古窯の見学」
①浅田博造（春日井市教委）②下原古窯 ③12名

22日：【犬山市】まほら講座「善師野のいか石」
①服部哲也（ニワ里） ②青塚古墳 ③37名

1月

10日：出前授業「入鹿切れ」
①大塚友恵（ニワ里）②犬山市立栗栖小

18日：【犬山市】まほら講座「城東の歴史あれこれ」
①高橋幸子（城東の歴史を知る会）②青塚古墳 ③36名

19日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「松ヶ洞古墳群」
①酒井将史（名古屋市教委） ②しだみゅー ③88名

22日：堀部邸歴史文化会「水の祭祀と天火明命」
①在野一生（ニワ里） ②堀部邸

25日：【名古屋市】講座「発掘調査って何？」
①服部哲也（ニワ里） ②しだみゅー ③80名

26日：【名古屋市】歴里講座「お庭に埴輪プロジェクト」
①愛知県陶磁美術館職員 ②愛知県陶磁美術館 ③20組

2月

1日：【犬山市】まほら講座「城東地区の自然と地質」
①足立守（名古屋大学名誉教授） ②青塚古墳 ③40名

4日～7日：栗栖プロジェクト 瀬之上遺跡試掘調査
②犬山市栗栖 ③現地説明会17名

15日：【養老町】象鼻山きのこ栽培ワークショップ
①津田 格（森林文化アカデミー） ②ふれあいセンター養老 ③10組24名

16日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「半田山古墳群」
①鈴木一有（浜松市教委） ②しだみゅー ③51名

19日：堀部邸歴史文化会「尾張氏と河内王権」
①岡本利雄（ニワ里） ②堀部邸

19・20・22日：青塚古墳を見守る会 古墳草刈活動
②青塚古墳 ③のべ60名

23日：【名古屋市】歴里講座「お庭に埴輪プロジェクト」
①愛知県陶磁美術館職員 ②しだみゅー ③20組

23日：しみんていフォーラムパネル出展
②楽田ふれあいセンター

24日：【犬山市】東之宮古墳散策ツアー
①赤塚次郎（ニワ里） ②犬山・各務原市周辺 ③25名

25日～令和3年1月31日：【尾張旭市】「古代山田郡と渋川遺跡」
②スカイワードあさひ歴史民俗フロア

28日：古墳よ jazz を聴け！
②青塚古墳

28日：【名古屋市】講座「発掘調査って何？」
①愛知県埋蔵文化財センター職員 ②愛知県埋蔵文化財センター ③16名

3月

1日：ニワ里ウォーキング「瑞龍寺山山頂墳」
①赤塚次郎（ニワ里） ②瑞龍寺山 ③15名

27日：東之宮古墳 鏡チョコレートワークショップ
①浅見貴子（ニワ里） ②堀部邸 ③11名

- 木之下城伝承館・堀部邸管理（入館者数 5,348名）
- 青塚古墳史跡公園管理【犬山市】（入館者数 16,483名）
- 「歴史の里」しだみ古墳群指定管理【名古屋市】（入館者数 154,922名）
- 青塚古墳パンフレット作成【犬山市】
- 昼飯大塚古墳ペーパークラフト製作【大垣市】
- 文化遺産カード v 弐発行【美浜町】【名古屋市】【海津市】【尾張旭市】【大垣市】【弥富町】など
- 岐阜大学郷土博物館整理支援業務【岐阜大】
- 東町田墳墓群パンフレット作成【大垣市】
- 白鳥塚古墳ペーパークラフト・古墳消しゴム作成【名古屋市】
- 東之宮古墳パンフレットデータ作成【犬山市】
- 犬山市立池野小学校展示資料作成支援

2019.4 ▶ 2020.3

令和元年度 活動年表

日にち：【委託市町村名】行事名・「タイトルなど」
①講師名（敬称略） ②開催場所 ③参加者数

桃色：ニワ里ねっと自主事業
緑色：文化遺産関連受託事業

4月

13 日：月津塾「倭鏡」製作公開実験
②堀部邸 ③ 25 名

13 日：ニワ里サイクリング「春の尾張平野の国分寺跡をめぐる」
①古川博昭（ニワ里） ②清須市周辺 ③ 6 名

14 日：【名古屋市】しだみゅーシンポジウム「志段味大塚古墳の鈴が鳴る」
①森下章司（大手前大学）ほか ②しだみゅー ③ 171 名

17 日：堀部邸歴史文化会
①在野一生（ニワ里） ②堀部邸

20 日：古墳よ jazz を聴け！
②青塚古墳

20 日～ 5 月 12 日：堀部邸春の特別展「犬山百花繚乱ー第 1 回中野耕司写真展ー」
②堀部邸

21 日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「鈴鏡から文化を視る」
①赤塚次郎（ニワ里） ②しだみゅー ③ 108 名

28 日：堀部邸特別展・展示解説
①中野耕司（ニワ里） ②堀部邸

5月

4・5 日：鯉のぼりイベント
②青塚古墳史跡公園

5 日：【名古屋市】しだみゅー春まつり
②しだみゅー

5 日・12 日：堀部邸特別展・展示解説
①中野耕司（ニワ里） ②堀部邸

11 日：青塚古墳まつり
②青塚古墳 ③ 1100 名

15 日：堀部邸歴史文化会「尾張氏と河内王権」
①岡本利雄（ニワ里） ②堀部邸

18 日：ニワ里ねっと総会

19 日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「埴輪から地域を視る」
①浅田博造（春日井市教委） ②しだみゅー ③ 100 名

26 日：青塚こども教室「親子で自然ウォーキングin善師野・木曽街道」
①半谷美野子（森林インストラクター）②善師野周辺
③ 5 組 13 名

26 日：月津塾 「自分で作る〝小型鏡〟ワークショップ」（1）
①赤塚次郎（ニワ里） ②堀部邸 ③ 8 名

6月

1 日：猪之子座「上方落語 九雀亭」
①桂 九雀（落語家）ほか ②堀部邸 ③ 26 名

2 日：【名古屋市】しだみゅー寄席「古墳 de 上方落語 九雀亭」
①桂 九雀（落語家） ②しだみゅー ③ 81 名

2 日：青塚古墳を見守る会 古墳の草刈り作業
②青塚古墳 ③ 48 名

8 日：ニワ里カレッジ「はにわ誕生物語」
①赤塚次郎（ニワ里） ②青塚古墳 ③ 28 名

16 日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「土器から時を視る」
①早野浩二（愛知県埋蔵文化財センター） ②しだみゅー
③ 81 名

19 日：堀部邸歴史文化会「東之宮古墳出土の和風鉄太刀」
①牧野克昭 ②堀部邸 ③ 12 名

22 日：古墳よ jazz を聴け！
②青塚古墳 ③ 84 名

23 日：ニワ里バスツアー飛鳥・葛城展示見学ツアー
①赤塚次郎（ニワ里） ②飛鳥資料館ほか ③ 24 名

26 日：入鹿切れ慰霊祭
②入鹿池周辺 ③ 3 名

29 日：月津塾「琥珀ペンダント作り」ワークショップ
②堀部邸 ③ 5 名

30 日：月津塾「自分で作る〝小型鏡〟ワークショップ」(2)
①赤塚次郎（ニワ里） ②堀部邸 ③ 9 名

7月

1 日：【養老町】象鼻山きのこ栽培ワークショップ
①津田 格（森林文化アカデミー） ②日吉小学校

11 日：栗栖プロジェクト「火おこしの歴史」
①纐纈 茂（名古屋市教委）ほか ②栗栖小 ③ 18 名

14 日：【養老町】火打石ワークショップ
①水野裕之（名古屋市教委） ②養老町 ③ 8 組 23 名

17 日：堀部邸歴史文化会「かみつけの國古墳巡り」
①伊藤宏樹（ニワ里） ②堀部邸 ③ 14 名

21 日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「野古墳群」
①中井正幸（大垣市教委） ②しだみゅー ③ 79 名

25 日：出前授業 1/5 サイズの青塚古墳を描こう
①ニワ里スタッフ ②楽田児童センター

28 日：【名古屋市】夜の音楽会 in しだみ古墳群「天空のテノール」
①包金鐘（テノール歌手）ほか ②しだみゅー ③ 350 名

28 日：【大垣市】昼飯大塚古墳のペーパークラフトをつくろう
①ニワスタッフ ②大垣市歴史民俗資料館 ③ 14 名

31 日：青塚こども教室「青塚古墳見学会」
①ニワ里スタッフ ②青塚古墳 ③ 8 組 28 名

8月

4 日：石あげ祭り「邇波里連」
②尾張冨士大宮浅間神社 ③ 11 名

10 日：ニワ里カレッジ「しだみ古墳群の埴輪」
①酒井将史（名古屋市教委） ②青塚古墳 ③ 35 名

11 日：古墳よ jazz を聴け！
②青塚古墳

17 日：青塚こども教室 「小牧・長久手の合戦すごろく」
①ニワ里ねっとスタッフ ②青塚古墳 ③ 1 組 5 名

18 日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「和田岡古墳群」
①井村広巳（掛川市教委） ②しだみゅー ③ 65 名

21 日：堀部邸歴史文化会「濃尾を教える稲木神社」
①在野一生（ニワ里） ②堀部邸 ③ 12 名

24 日：青塚こども教室 「青塚古墳見学会」
①ニワ里ねっとスタッフ ②青塚古墳 ③ 3 組 8 名

25 日：【養老町】養老町歴史講座「聖武天皇の東国行幸」
①早川万年（元岐阜大学教授） ②養老町 ③ 60 名

31 日：月津塾「倭鏡に映る里・東之宮古墳から見えてくる犬山の原風景」
①赤塚次郎（ニワ里） ②堀部邸 ③ 37 名

9月

1 日：青塚古墳を見守る会 古墳の草刈り作業
②青塚古墳 ③ 45 名

14 日：【犬山市】東之宮古墳見学ツアー
①赤塚次郎 ②東之宮古墳・しだみ古墳群 ③ 25 名

15 日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「大岩山古墳群」
①進藤 武（野洲市教委）②しだみゅー ③ 81 名

18 日：堀部邸歴史文化会「近つ飛鳥の尾張郷」
①岡本利雄（ニワ里） ②堀部邸 ③ 14 名

21 日：みやげ話の会「藤ノ木古墳から聖徳太子の飛鳥への道」ほか
①岡本利雄・大塚友恵（ニワ里） ②青塚古墳 ③ 13 名

10月

3 日：【養老町】象鼻山きのこ栽培ワークショップ
①津田 格（森林文化アカデミー） ②日吉小学校

5 日～ 11 月 4 日：堀部邸秋の特別展「祭礼＊犬山祭フォトグラフ いぬやま祭り人 第 2 回中野耕司写真展」
②堀部邸

5 日：ニワ里カレッジ「しだみ古墳群の埴輪見学」
①酒井将史（名古屋市教委）②しだみゅー ③ 11 名

東之宮古墳に観る二集団と東海六部族

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
赤塚　次郎

1　はじめに

愛知県犬山市に所在する国史跡「東之宮古墳」、2014年には整備に伴う調査を経て報告書が刊行された。紆余曲折はあったが、まもなく当面の史跡整備が終了し、多くの皆さんが白山平に登り「東之宮古墳」と出会う機会がすぐそこまできている。個人的な思いであるが、1998年の最初の東之宮古墳整備にいたる打合せよりすでに20年余の歳月が流れ、1973年（昭和48）の最初の調査から実に47年の月日が流れた。その間、東之宮古墳は白山平山頂から、この犬山の出来事をじっと静かに見守っていたのである。

さて今までの調査経緯と2005年刊行の報告書を踏まえて、2018年刊行の概説書では私見をとりまとめておいた。ここではさらに視点を広げて東之宮古墳を巡る3・4世紀の「邇波」、犬山扇状地での具体的な集落遺跡のイメージと、さらには東海地域の各地域社会との関係を整理しておくことにしたい。この間、いつくかの会場にて講演・プレゼンを繰り返してきたが、その内容をあたらめて覚書としてとりまとめておくことにしたい。

2　東之宮古墳とその仲間たち

2.1　竪穴式石槨・棺から部族社会を視る

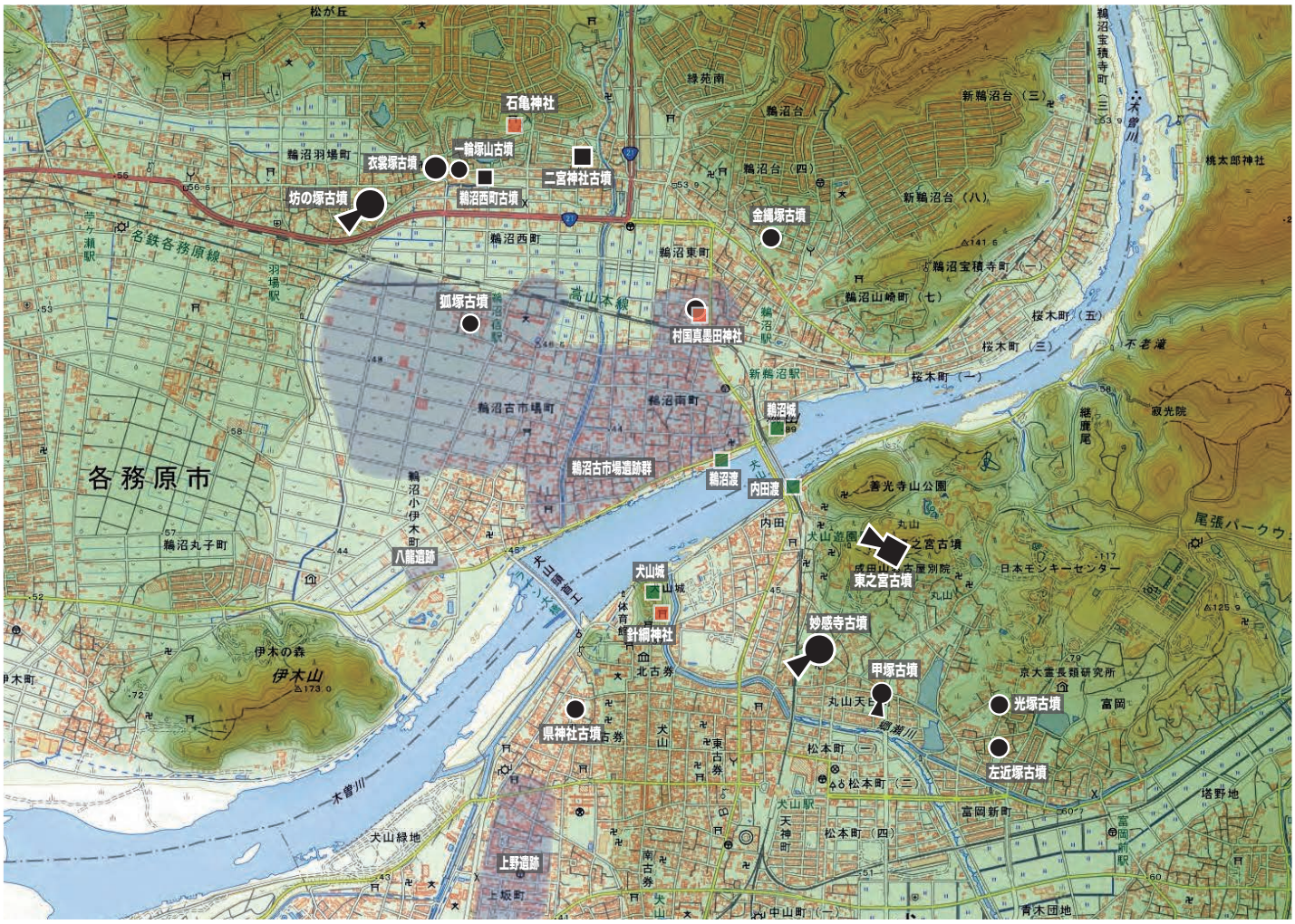
東之宮古墳の内容については各報告書に委ねるとして、ここでは赤塚2018で簡単に触れておいた東之宮古墳に眠る「冬至の王」とその仲間たちの具体的なイメージを再確認することからはじめることにしよう。その手がかりを竪穴式石槨とそこに据え置かれた多くの副葬品配置から読み取ることになる。

さて具体的に見ていこう、まず東之宮古墳竪穴式石槨の構造と副葬品配置を確認しておきたい。竪穴式石槨は東之宮古墳後方部中央に存在する東西11、南北7メートル、深さ5メートルの墓壙状二段窪み内側に、長さ4．93、最大幅1．0、高さ1．2メートルを測る石槨が造られた。

因みに竪穴式石槨が構築された場所を確認しておくと、後方部の主軸線上、墳頂部から1．5メートルほど掘り下げた位置に天井石（標高141．5メートル）が見つかっており、基底部は標高140メートルに位置する事から、後方部の高さの概ね半分の位置に相当する。またこの基底部の高さをそのまま前方部に持っていくと、まさに前方部高さとほぼ同じ高さになる。つまり前方後方墳の構築段階において、その中間地点である前方部のレベルで、重要な一つの工事工程が存在したと判断できる。竪穴式石槨の構築方法は、墳丘が整えられた後にあらためて掘削する「掘込墓壙」ではなく、基盤造成面から前方後方形を整えつつ、高さ標高140メートルの位置まで「盛り土」を積み上げる。その後、周囲に土を積み上げ王が眠る石槨構築するための墓壙状の窪みが用意された。そしてその内部に竪穴式石槨が構築され、様々な段階での儀式が執り行われつつ、王が眠る木棺と副葬品配置が行われたと想定できよう。さらに注意したいのが墓壙状の窪みを埋める土は、東之宮古墳の基盤造成面と同じ「段丘堆積層」内の「くさり礫」を多用する点。現場土（発生土）を意図的にまとめ使用する、埋土への強い拘りが感じられる。

ところで内部に安置された「木棺」であるが、粘土床に写し取られた棺の痕跡から、棺の長軸の大きさは、ほぼ石槨の内法と同じで、隙間がほとんどない。粘土床に僅かな窪みが見られるので棺底部は、いわゆる割竹形木棺ではなく、大きく緩やかな弧を描いていた棺底を持つ。木棺は東に高く（標高140．45メートル）、西に低く（標高140．4メートル）5センチメートルほどの勾配をもち、長軸の底面中央はほぼ

図１　鵜沼古市場遺跡群と東之宮古墳（地図は電子国土web地図）



平坦で、端部はやや持ち上がるような傾斜をもつ。以上の状況から木棺は側面が緩やかに傾斜し、端面もやはり傾斜を持つ、東側で広く西でやや狭いのは棺材の原形に由来すると推定すれば、やはり組合式というより、長大な巨木（コウヤマキ材）を用いた刳抜式木棺であった可能性が高い。また各側面に傾斜を持つ点から、当地域での弥生時代からの伝統的な船状の「槽形木棺」を意識した作りであった可能性が高い。伝統を踏まえた木製の「棺」が用意されていたことになろう。

2.2 副葬品配置から読み取れる風景

次に副葬品配置であるが、副葬品（鏡11面と無類の石製工芸品約140点）をやや復元的に描いてみたのが以下の案である。

まず鏡であるが、三角縁神獣鏡4面、同向式神獣鏡1面、方格規矩倭鏡1面、四獣形鏡1面、そして人物禽獣文鏡が4面である。唯一の棺内副葬鏡が中国製鏡ではなく人物禽獣文鏡Ａである点は重要である。さらにその鏡は意図的に破砕され復原配置されたものと想定している。その他の鏡群はすべて東壁の大型の「立ち板石」、棺外で大きく4組に分類され立て掛けられるようにして配置されていた。個々に布に包まれ、5・6号鏡だけは桧の木箱に納められていた。それぞれのセットが王との関係を意味する重要な情報と考えることができる。（組合せについては赤塚２０１８参照）

次に注目すべきは竪穴式石槨側壁に配置された多量の鉄剣、鉄槍、鉄刀類があり、これら多くの武器類は鞘入り、鞘装着のまま埋納されている。注意したいのが槍・鉄鏃など3点がセットとなりいくつかの組み合わせに基づき配置されていた事である。また因みに東小口の北側にまとまる針・鑿・刀子などの小型鉄器類は、被葬者が発注した精巧な文様を割り付けるための鏡鋳型などの製作工具類（抱え込んでいた職人集団）と想定した。

一方で棺内の装身具は、残存していない衣服などの多くの有機物（推定）を除けばいたってシンプルである。首飾りにやや大ぶりな管玉と勾玉3点が組み合わされ、有機製冠あるいは髪飾りには小ぶりの管玉が用

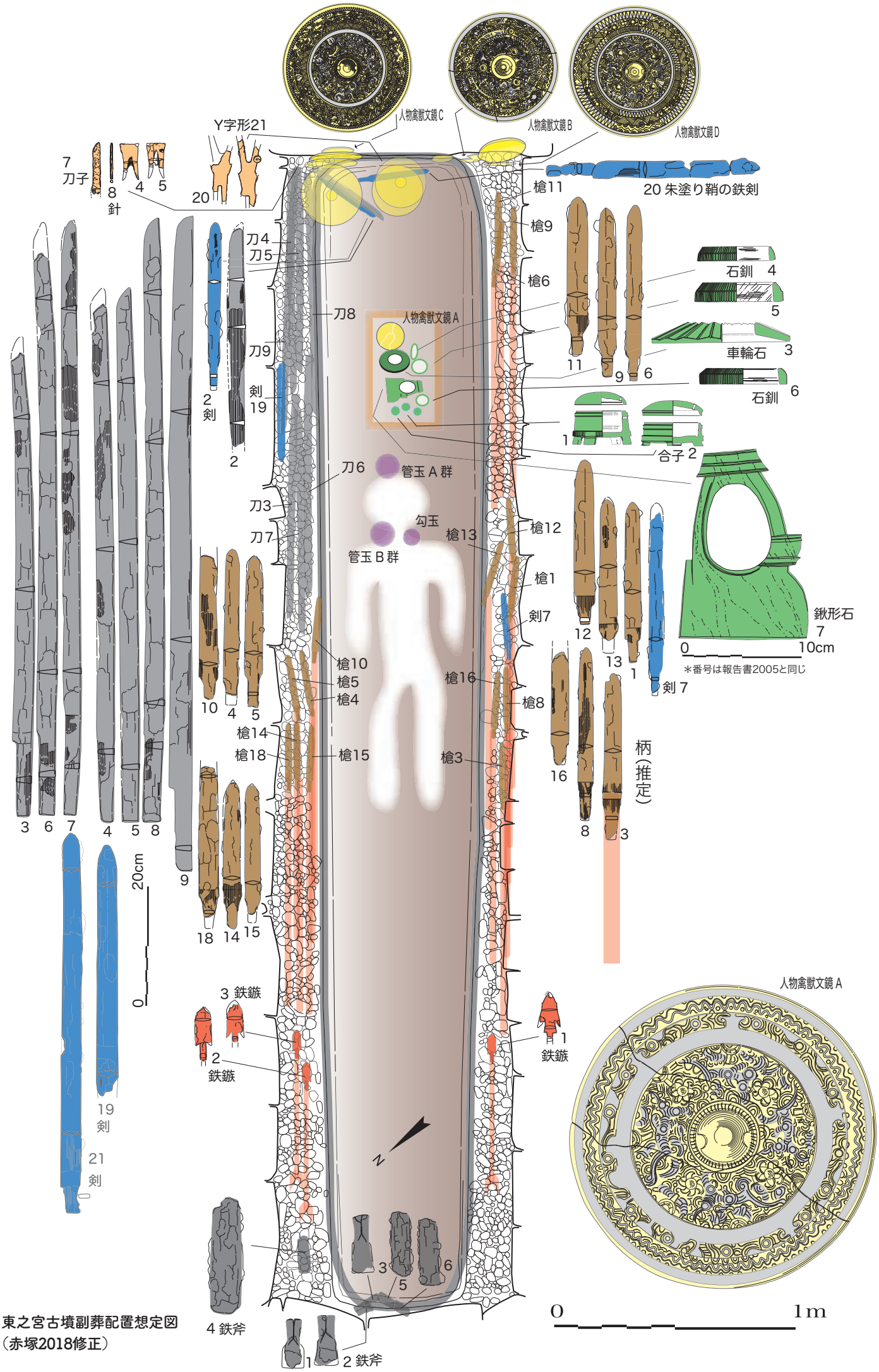


図２　東之宮古墳副葬配置想定図
（赤塚2018修正）

いられていた。管玉は１３７点(第５次調査で1点追加・計１３８点)。ところで棺内の象徴的な存在が、王が眠る頭部上に据え置かれた木箱「宝石箱」(桧製)である。その中には石製品の鍬形石1点、車輪石1点、石釧3点、合子2点。加えて破砕された人物禽獣文鏡Ａが収められた。Ａ鏡の配置と存在そのものが東之宮古墳の被葬者像を強く印象付けるものであることは間違いない。

以上の副葬品とその配置状況から、東之宮古墳の被葬者の性格が少しづつではあるが明らかになってきた。つまり人物禽獣文鏡を代表とする個性的な倭鏡群と、東濃産の石製品(鍬形石・石釧・合子など)を所有する点は、これらは濃尾平野の弥生時代からの伝統的地域社会が育て上げた文化そのものであり、高水準の工芸技術作品でもある。したがって東之宮古墳の被葬者は、地域の伝統的な特産物を背景に優れた工芸技術集団を把握し、犬山扇状地から可児盆地にいたる古代邇波の領域全体に多大な影響力を及ぼした、伝説的な人物であったと考えて間違いなかろう。

2.3 二つの部族と5つの集団

東之宮古墳の副葬品の多くは、上述した棺の中に置かれたものではなく、棺と石槨とのあいだに整然と配置された一群の資料である。しかも雑然と置かれたわけではなく、明確な意図をもって分類し、区分けして配置されていた。石槨内で棺外の資料は主に鉄製品と鏡類となる。まずは鉄製品について見ていこう。内容は鉄剣4点・鉄刀9点・鉄剣鉄槍17点・鉄鏃6点・鉄斧6点、その他に針筒1点・Ｙ字形鉄器2点・刀子・鉋・鑿などである。

まず注目したいのが槍と鏃である。「槍」であるが鉄剣鉄槍17点のうち形状だけからは槍か剣なのかは判別できないが、配置状況から明らかに槍先と考えられる資料は合計15点出土しており、全て石槨と棺の間に切っ先を東に向け整然と並び置かれていた。南壁の板石付近に3つ、その西側にはやはり3つの槍がまとめられ2組がやや前後を開けてきちんと配置されている。同様に反対側に北壁面にも3つの槍が2組。槍の間には約1メートルほどの空間があるが、おそらく美しく飾られた木製の「柄」が装着されていたと思われる。槍の長さは平均で1メートル20から30センチメートルはある。結果として「3点がまとめられ5組のセット」が石槨には納められた。このことからどうやら葬儀に参列した5つの集団が見えてくる。

さらにその西、棺の西端付近には3点の鉄鏃が北に2点・南に1点形が異なる2種類の鉄鏃があり、やはり矢柄が装着されたと思われる空間がある。矢の大きさは5・60センチメートルはあったであろう。3点はすべて東海地域の伝統的な五角形鏃の形を踏襲しており、加えて鏃の形そのものは出身部族を表すものであった。したがって両脇に据え置かれた二つの鉄鏃は、王を支持した大きな2部族集団を表現するものであったと考えておきたい。

以上鉄鏃は「二種類3点」、槍は「3点一組が5セット」、このことから東之宮古墳の王は「二つの大きな部族集団を抱え、内部に5つの小集団」が存在していたことが類推できよう。それぞれの集団から王への捧げ物がこの組み合わせに反映されていると推定したい。

2.4 「邇波」の二つの集団

では具体的にその2つの部族集団とはなにを意味するものなのかを、遺跡分布などから読み解いてみたい。

「邇波」郡を中心とする前方後円(方)墳の基本的な動向を見ていくと大きく二つの流域に古墳分布が存在することがわかる。まず犬山市白山平周辺と各務原市鵜沼に大型前方後円(方)墳が造営され、前者には東之宮古墳・甲塚古墳・妙感寺古墳が、後者の鵜沼古墳群には一輪塚山古墳・衣裳塚古墳、坊の塚古墳が存在する。そしてそこには鵜沼古市場遺跡群と呼ぶ広大な遺跡群が存在する。調査の詳細は未だ見えてきていないが、おおむね木曽川本流右岸に3・4世紀の遺物分布が集中するようであり、地形からも木曽川本流を挟んで鵜沼と犬山内田地区の段丘崖とそれに囲まれた微高地上を立地とする集落遺跡が推定できる。因みのここには式内社「村国眞墨田神社」と「針綱神社」が鎮座する空域でもある。

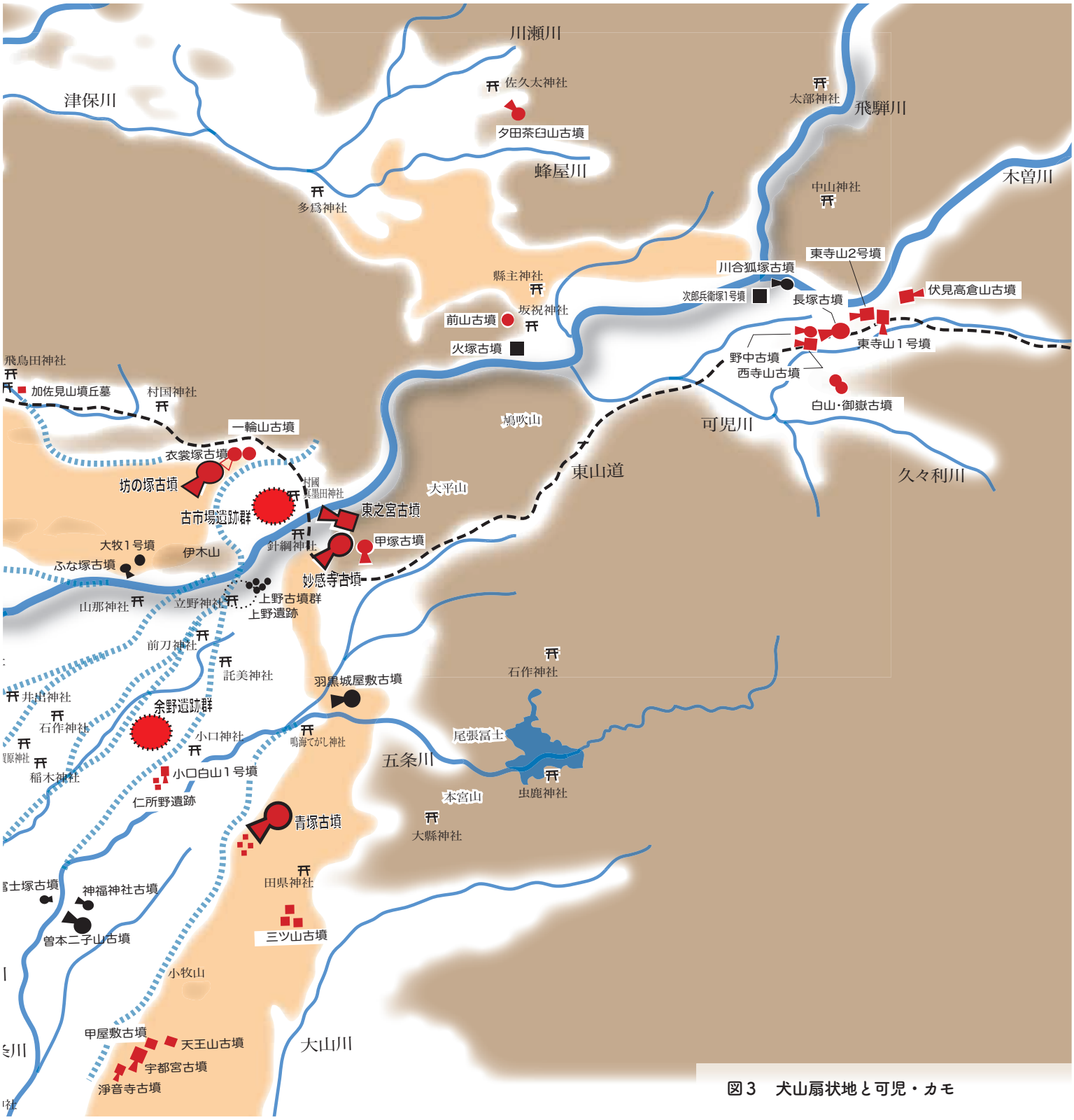


図３　犬山扇状地と可児・カモ

そして今ひとつが五条川水系であり、２世紀の墳丘墓が調査されている大口町の仁所野遺跡、そして現状では当地域で最古の前方後方墳の可能性が高い小口白山１号墳が存在する。また低地帯を挟んで犬山段丘崖には青塚古墳が存在する。この空域には犬山扇状地最大規模の集落遺跡「余野遺跡群」が所在し、式内社「小口神社」が鎮座する。小口とはあるいは御口の意味ともとれ、邇波の元・入口を意味するものかもしれない。犬山扇状地北部域の範囲をここでは、御口（小口・余野遺跡群）から木曽川本流とその分流域、沼（鵜沼古市場遺跡群）を含めた領域を想定する事にしたい。この空域には、その後の大型前方後円（方）墳の動きとして、東之宮古墳・青塚古墳・坊の塚古墳・妙感寺古墳（邇波四代の王墓）が存在し、そのことからも東之宮古墳を支えた二つの部族社会とは、「鵜沼古市場遺跡群」と「余野遺跡群」を意味するものと理解しておきたい。そしてその内部に５つの小集団をかかえていた事になる。東之宮古墳人物禽獣文鏡Ｄには５つのヒトが連なる表現が見事に鋳出さ

れている。あるいはこの「5つの連なるヒト」とはこの二つの遺跡群に繋がる5つの集団を示唆しているものかもしれない。

犬山の木曾川分流域と五条川水系の地縁的かつ伝統的地域社会をまとめあげた最初の人物こそが、東之宮古墳の被葬者であった事は間違いない。その後は部族社会的な地縁的関係を基礎として首長墓（邇波四代の王墓）が犬山市域を中心に次々と造営されたことになる。

図4　5つの連なるヒト（人物禽獣文鏡D）

2.5 納（おさ）めの剣

さて話を再び東之宮古墳副葬品配置にもどそう。次に注目したいのが特徴的な存在「朱塗り鞘の鉄剣(20)」の存在である。朱塗り鞘の鉄剣とはおそらく木棺の上部に置かれた特別な剣で、埋葬儀礼の最後を締め括るものであったと推定している。

まずは「鉄剣4点・鉄刀9点、そして鉄剣鉄槍17点」の状況を再点検してみよう。片刃の鉄刀9点の内8点がすべて北壁の東部にまとめられた。切先はすべて東向き。刃はことごとく棺側にむけられ、刀には木質の痕跡がのこり「鞘入り」であったことがわかる。どのような鞘であったか想像するしかないが、8点の直刀が置かれていた。

次に配置状況などから「鉄剣鉄槍17点」のうちの2点を鉄剣と想定し、鉄剣は合計6点であったと推定。その内60センチメートル以上の大きい剣2点＋1点（破片）は、鉄刀とおなじ北壁の東部に置かれた。配置の重なり状況を見ると、少なくとも剣21は、おそらく刀剣類では最も早い段階で収められた品物と思われる。神々が携帯する長い「十拳剣」に相当するこれらの3点は、あるいはこの鉄刀類をまとめた場所に収められた特別な剣であったかもしれない。他の1点が朱塗り鞘の鉄剣と共に、さらに1点は槍が配置された南壁中央部に置かれていた。どうやら王が眠る棺の両脇に最初に北・南壁に重要な剣をそれぞれ配置し、その後に槍や刀剣類が次々に配置されたとも考えられる。そしてその儀式が終了した時点で、棺の東端部で「朱塗り鞘の鉄剣」とともに「鉄刀1点と鉄剣1点」がおそらく棺に上に収められ、副葬品埋納儀礼が終了した。ちなみに朱塗り鞘の鉄剣と同時におかれた刀剣は、短い鉄刀1点と鉄剣1点の「3」という数字となるが、出土状況から見ると、朱塗りの鉄剣と他の刀・剣の2点とは配置の向きがずれる。あるいは「刀・剣」の2点が二つの部族集団の代表者が、そして儀式を締める第三者が「朱塗りの鉄剣」配置を最後の所作として実施した。

東之宮古墳での特徴的な「朱塗り鞘の鉄剣」は、儀式を締める納めの鉄剣で軸線上に真横に配置されていた。このような軸線に直行、あるいは並行して単独で据え置かれる「剣」が古墳時代を通じて散見できる。「朱塗り鞘の鉄剣」を最後に置いた人物とはいったい誰であったのか、興味深い所である。

2.6 ある使命を担った「王」

もうひとつ東之宮古墳副葬品配置で際立つ遺物が見られる。それは「鉄斧」である。東之宮古墳竪穴式石槨の西壁周辺にはほとんど遺物が見られないが、そこに置かれたものは「鉄斧」6点であった。その内訳は板状の短冊形鉄斧が3点、木製の柄を装着するように工夫された袋状鉄斧が3点。しかしそのうちで特に注目したいのが大型の鉄斧1点である。この鉄斧は他に比べ倍以上に大きく、また置かれた場所も一つだけ離れて主軸に並行してまっすぐに、棺の脇に特別に大切に置かれていた。他の5点は棺を置く粘土床と西壁に重なるようにまとまって発見されているのとは対照的な状況である。おそらく東壁沿いで行われた最後の儀式、朱塗り鞘の鉄剣配置と同じように、足元では鉄斧を棺の上に最終段階の

儀式として据え置いたと想定しておきたい。ただここでやはり大型の板状鉄斧だけは特別扱いのような状況がみられる。大きさは長さ19．5センチメートル・幅3．4センチメートルを測る。この鉄斧には布や木質の痕跡は残っていなかったが、柄が装着されていたとも考えられる。しかし後述する弘法山古墳では柄は外されて、布で包まれ木箱に納められていた。興味深い指摘である。いずれにしてもこの特別の斧はどのような意味をもつのであろうか。

古代一つのミッションを実行するにあたり、かの地に行き果たすべき役割、その使命を担う人物あるいはグループに渡されるアイテムに「斧」がある。例えば統帥権の象徴としての斧を渡す事は『日本書紀』などに登場する。特にヤマトタケル伝承や磐井の乱に登場する場面だ。いわゆる「斧鉞」と呼ばれる君主が出征する将軍に統率のしるしとして渡したもの。またある目的を遂行するために全権を委ねられたモノにその証として渡される。これらと同じ意味をもつものであると考えると、形状と出土状況の際立った違いを総合すると、この鉄斧が意味するものとは、あるいは「王」に委ねられた「ある使命」であったと推測できるかもしれない。同様な副葬品配置で「斧」に際立つ特徴的な状況が見られる古墳がいくつか確認できる。3世紀の前方後方墳である松本市弘法山古墳では、主軸線上のど真ん中にポツンとおかれた「斧」が存在する。報告書でも斧鉞を意味する可能性を早くから指摘されてきた。また近くでは可児市見隠山白山古墳での2つの鉄斧の配置も同様な思想に基づくものと推定できる。では誰から何のために渡されたのであろうか。それは倭王であるか、この地の部族社会の神々であるのか。これによって意味づけが大きく変わって来る。いずれにしろ斧鉞の影がこの大型の鉄斧に投影されているように思える。東之宮古墳から出土した5つと一つの特徴的な鉄斧には、当地域の部族社会が抱えていた何らかの「5つの目的と絶対に成し遂げなければならない1つの使命・ミッション」があり、それを見事に遂行した英雄がここに眠るのである。その果たすべき使命とは、いったい何であったのだろうか。

2.7 邇波の上流域

以上、東之宮古墳の副葬品配置などから被葬者像を考えてみた。ここではさらに流域を少し広げて様子を見てみよう。まず注目したいのが木曽川本流域の可児・カモ地域である。現在は犬山市に北接し可児市として発展を遂げる地域であり、ここに注目すべき古墳群が存在する。近年の調査成果に基づき2・3世紀の墳丘墓から前方後円（方）墳へと展開するまとまりが指摘されてきた。中核となる場面は可児郡御嵩町伏見地区。中山道「伏見宿」、あるいは古代の「可兒駅家」推定地を含む可児川流域である。具体的には2世紀の方形墳丘墓群が調査された金ヶ崎遺跡（御嵩町伏見）や円形墓の可能性を残す上野山神古墳・桐野1号墳（可児市中恵土）。さらに可児川の左岸には神崎山墳丘墓が見られる。こうした2世紀から3世紀にかけての円形・方形墓を経て新たに登場するのが伏見高倉山古墳である。42メートルの前方後方墳であり、可児川を見下ろす丘陵の端部に造営された。さらにその後の展開として伏見地区には方形の伏見大塚古墳、前方後方墳である東寺山1号墳・2号墳、周囲には方形を基調とした古墳群が次々に造営され伏見古墳群を構成している。一方で伏見地区の西側に近接す

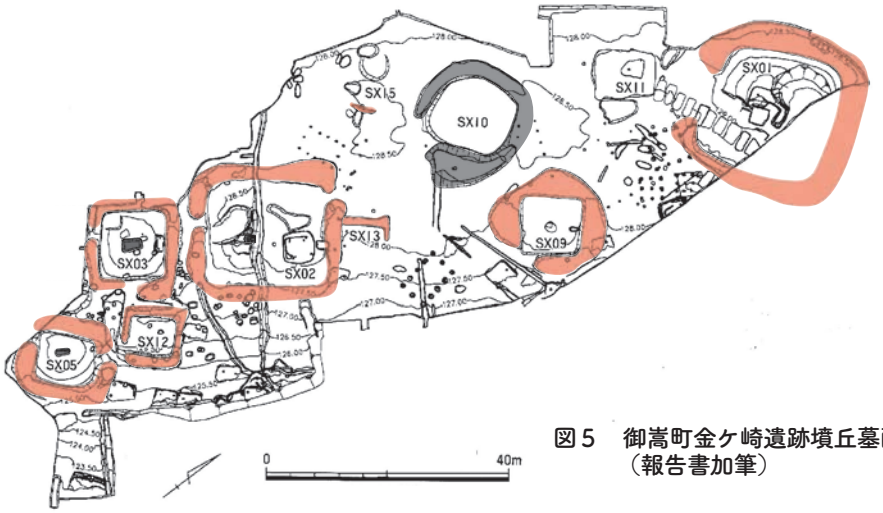


図5　御嵩町金ケ崎遺跡墳丘墓配置図
（報告書加筆）

る中恵土地区には前波古墳群が造営されていく。前方後方墳の西寺山古墳、前方後円墳の野中古墳・長塚古墳である。伏見地区と前波地区の二つの集団を二系列の動きとして捉えようとする考え方もある。大きく見れば、まず2世紀の墳丘墓が可児川をのぞむ段丘上に登場し、やがて遅くとも3世紀中頃には前方後方墳伏見高倉山古墳の造営にいたる点においては、研究者の見解に大きな違いはない。ただ可児川水系に基盤となる中核集落域が未だ見えてこないのはやや気になる点でもある。60メートルクラスの西寺山古墳は壺形埴輪を巡らす前方後方墳であり、犬山の青塚古墳との関係が読み取れる。したがって東之宮古墳造営段階において、これらの地区では40メートルクラスの前方後方墳が造営されていくことになり、ほぼ東海地域の一般的な動向と大きな違いは見られない。70メートルクラスの東之宮古墳の造営は、遅くとも廻間Ⅲ式期前葉段階ではじまっていると考えられる事から以下の諸点をまとめておくことができる。

1．濃尾平野周辺地域において、70メートルクラスの前方後方墳は東之宮古墳の造営を嚆矢とする。

2．東之宮古墳の被葬者が活躍した時代より邇波・可児カモ地域では40から60メートルクラスの前方後方墳が次々に造営を開始する。伏見・中恵土地域や同じく前方後方墳が集中する小牧市小木古墳群の動きもこうした動きの中で理解できよう。すると「斧鉞」を頂く東之宮古墳の王の使命とは、結果的に犬山扇状地から木曽川を遡った可児・カモ地域を含めた広大な領域に、弥生時代とは異なる新たな一つの造営環境・富の動員を可能にする環境を作り上げた事にあった。その意味は東之宮古墳の王を頂点とする邇波・可児・カモの部族社会の再編成であったのであろうが、それがどのような起因により行なわれたかは別の視点が必要となろう。

東之宮古墳が位置する鵜沼・犬山内田地区には上流域で確認したような、未だ先行する墳丘墓が見えてこない。東之宮古墳の造営は、いわば唐突な大型墳の出現である。伏見地区の2・3世紀の墳丘墓の動きを踏まえれば、おそらく東之宮古墳の造営に至る過程で、30・40メートルクラスの方形墳丘墓が造営されていた可能性があるが、現状では当地区にその痕跡さえ見えてこない。鵜沼古市場遺跡群の調査に期待したいが、一方でもう一つの集団、余野遺跡群には伏見地区で見てきたと同様な動きが指摘できる。余野地区仁所野遺跡の墳丘墓群とその中に出現した前方後方墳小口白山1号墳の存在である。はたして東之宮古墳とは、これらのいずれかの集団によるミッションの結果なのか、という問題に踏み込むには未だ資料不足でもある。

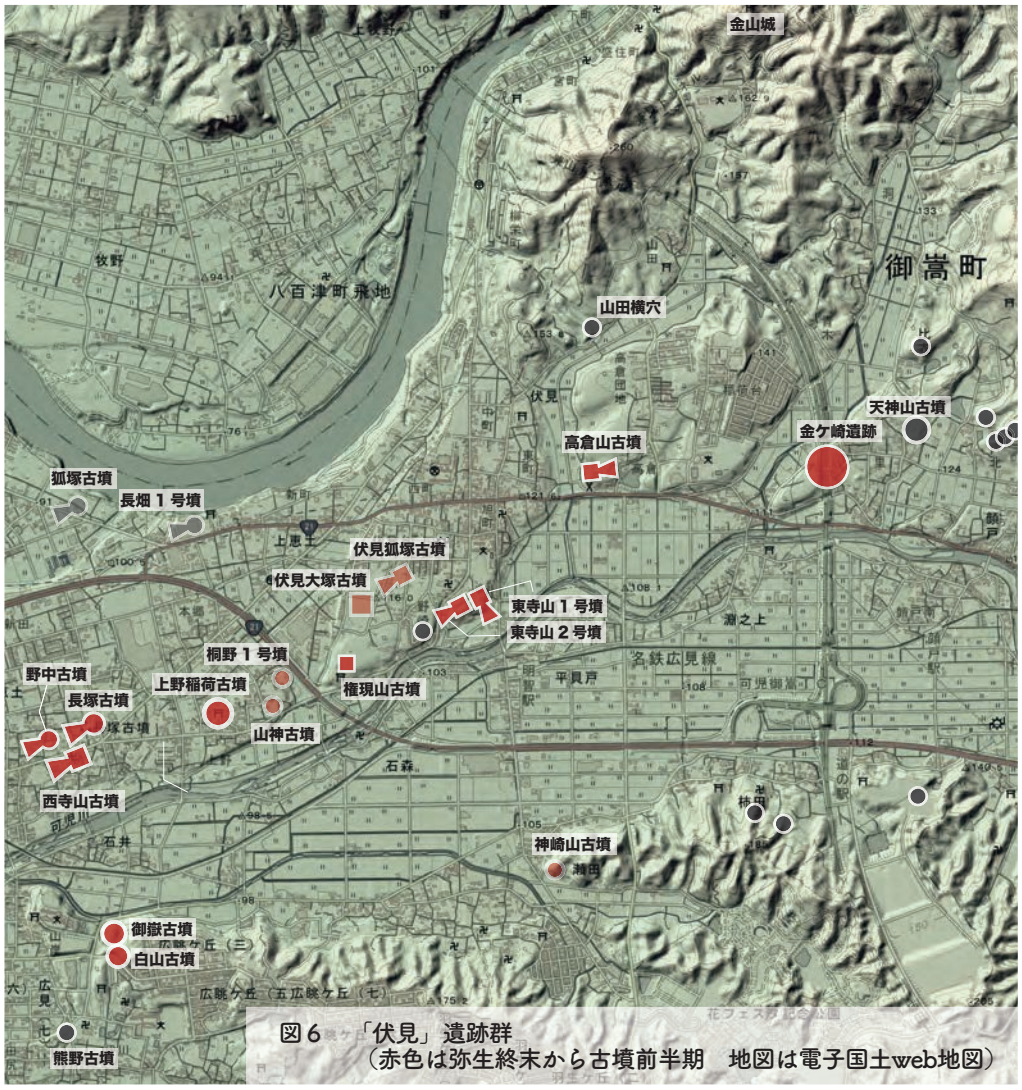


図６「伏見」遺跡群
（赤色は弥生終末から古墳前半期　地図は電子国土web地図）

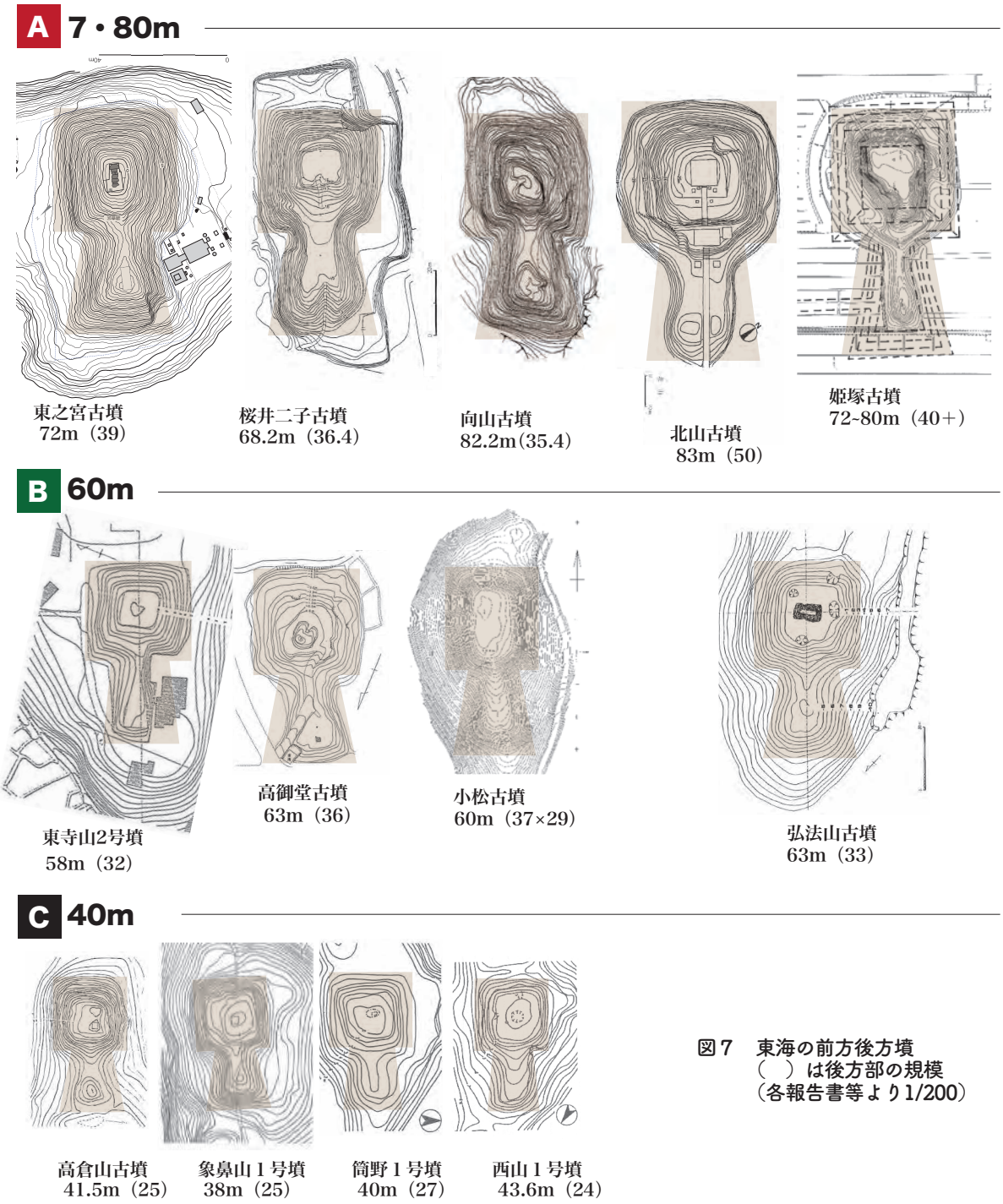


図７　東海の前方後方墳
（　）は後方部の規模
（各報告書等より1/200）

2.8 渡河

そこで別の視点として、木曽川と「路」との関係を整理しておきたい。律令期の「各務」駅家をどこに想定するかにより、意味合いが大きく異なるのであるが、「可兒」駅家は前述したように伏見古墳群が展開した現在の御嵩町伏見付近というのはほぼ一致を見ている。そこで木曽本流の渡河地点の経路が重要なポイントとなろう。やや時代が降るが、承久の乱で「尾張川」九瀬の渡しを中心とした戦の場面として鵜沼・板橋・池瀬・摩免戸(前度)などが登場する。板橋・池瀬を伊木と山那付近と考えるのがやはり妥当であり、式内社「山那神社」が鎮座するこの周辺には、現在も中世期の遺物が広く分布し、「山那切れ」の伝承とともに洪水多発地帯でもあった。古代の「東山道」がどこで木曽川を渡河していたのかは議論の分かれるところであるが、古墳時代から古代を通じて恒常的な渡場として鵜沼・内田の渡しが最も安定しかつ遺跡の動向・分布に符合している。例えば大型古墳造営を見ても、鵜沼坊の塚古墳や衣裳塚

古墳、犬山の東之宮古墳・甲塚古墳・妙感寺古墳などの分布から、鵜沼から内田を通過し丸山の南山麓を通り善師野に向かうルートが古くから指摘されてきた。ただ丸山から継鹿尾を抜け石原から土田へ抜ける路を想定する見方もある。しかし土田付近の可児川は渓谷、崖状であり恒常的な古代の渡河地点としては問題が多い。やはり善師野から帷子を通過し中恵土から伏見に至る、いわゆる後の「犬山街道」が一つの参考になろう。ちなみに後の「矢集連氏」が登場する可児郡矢集郷の推定地は、可児市帷子から可児川に出る「矢戸」付近とする見解がある。さらに帷子周辺からかつて中国鏡（虺龍文鏡）の出土が伝わり、「犬山街道」そのものが東之宮古墳から前渡・伏見古墳群という古墳時代前期の古鏡分布を直接繋ぐルートでもあった。鵜沼・犬山内田という犬山扇状地の扇の要から、初源的な「路」の整備がいつからどのように整えらようとしたのかを具体的に考えていくと、やはり東之宮古墳の造営という時期が一つの重要な起点として位置付けられてくる。河川等の治水対策を含め、それもまた一つの部族集団によるミッションだったかもしれない。

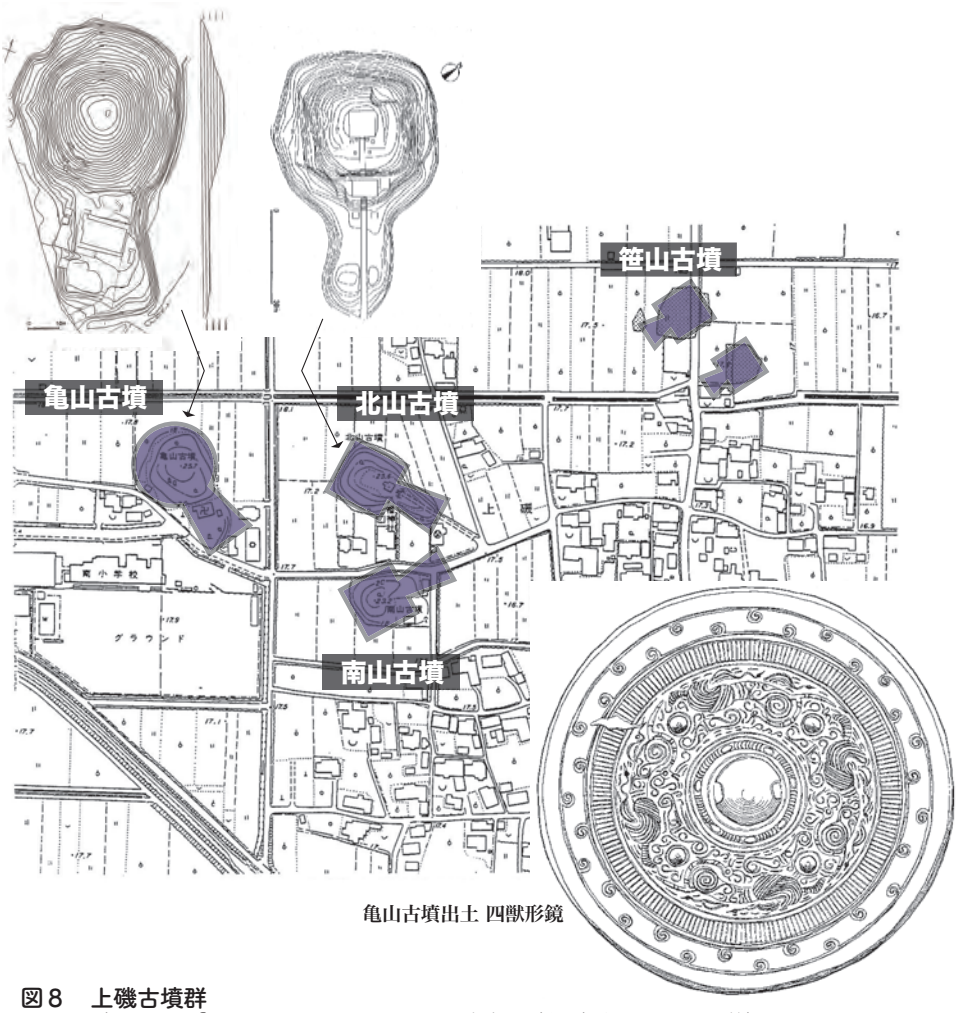


図８　上磯古墳群
（竹谷勝也『大野町遺跡詳細分布調査報告書資料（考古）編』2009に加筆）

3．東海の六部族

3.1　弥生時代の部族的規範

東之宮古墳の造営が、東海地域において一つの画期になる出来事であった事が明らかになってきた。そこで次に東之宮古墳の被葬者が活躍した時代である、３世紀中頃から後葉にかけての伊勢湾沿岸部の状況を整理し、評価する視点をまとめておきたい。実はそこには「東之宮古墳と同じクラスの前方後方墳」、70から80メートルクラスの前方後方墳がいくつかの地域で造営されていることがわかっている。それを東海地域の大部族連合をささえた、主要な六つの部族集団であると考えた。

まずその前に確認しておかねばならない視点がある。それは弥生時代からの地域社会の指導者を葬る墳丘墓の規模についてである。いくつかの論考にて言及したのであるが、完結にまとめておくと以下のようになる。弥生時代の集落遺跡における墳丘墓の中で最も大きな規模を有する墳墓を見ていくと、例えば清須市朝日遺跡や豊田市川原遺跡などから、その規模はおおむね30～40メートルが基本であったと考えてよい。つまりその時点でのトップリーダーとしてのお墓の規模は40メートルが最大値という数値が見えてくる。この点

は東海地域を含めた列島各地域においてもほぼほぼ同様な傾向が見られると認識している。弥生時代を通じて大きく逸脱する造営環境は見出し難い。したがってこの主墳丘に突出部を付加し墳丘墓を造ると、主墳の2倍の大きさが部族社会の伝統的な指導者層の大きさ「規範」であったと推定することができる。つまり70～80メートルクラスまでの大きさは、すべて地域社会が内包する部族社会の規範枠内での造営志向という事になる。以下これを前提と考える。従来前方後円（方）墳全てにおいて一律に形と大きさに階層性を付与させ、いわゆる倭王権からの墳墓造営許可制度と見間違えるような意見が多々見られるが、こうした見解には与しない。

3.2 東海六部族

さて、六部族を全て詳細に見ていく必要があるが、ここではその概略をまとめて整理していくことに留めたい。

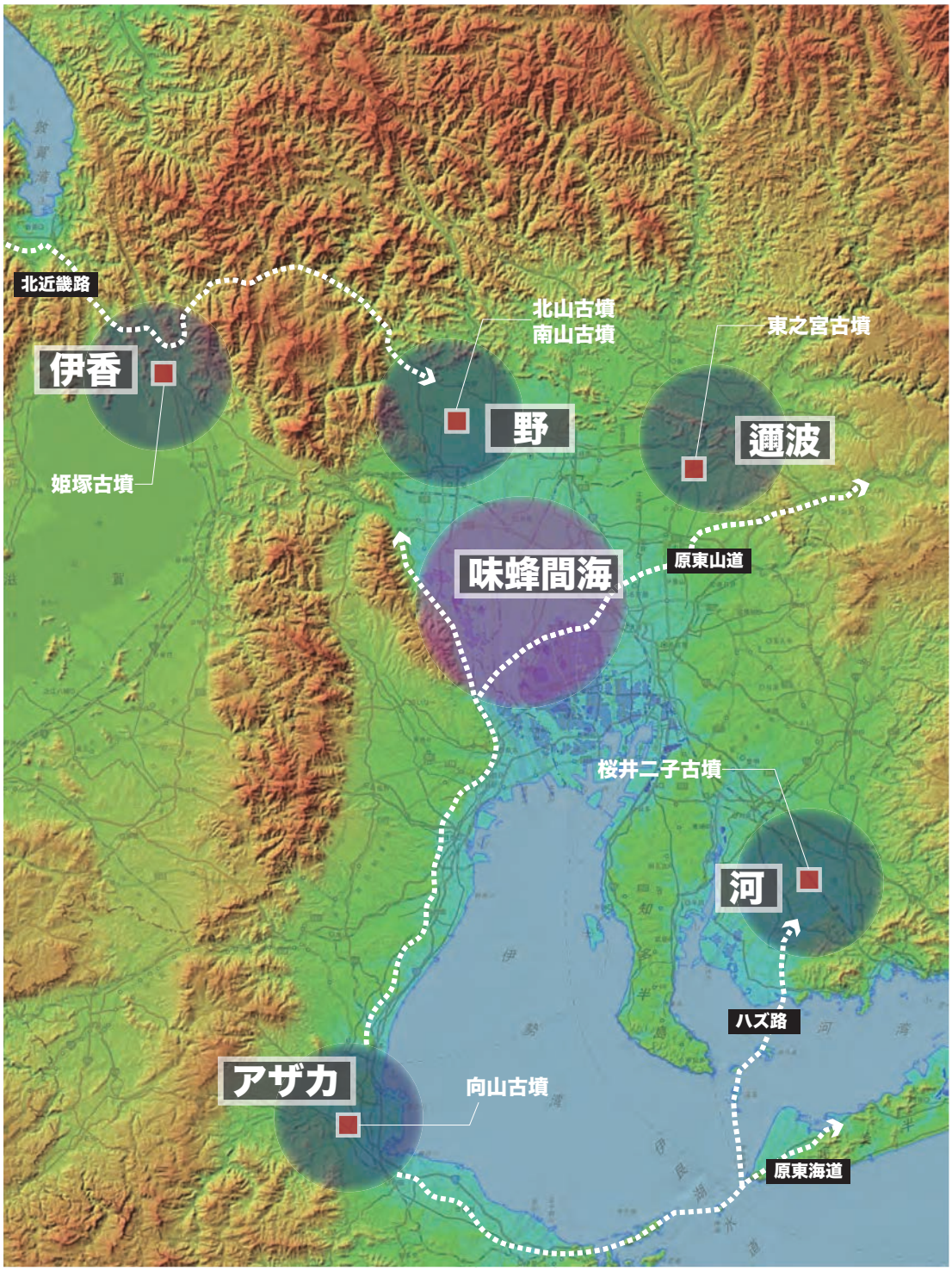
東海地域において70・80メートルクラスの前方後方墳で、かつ東之宮古墳とほぼ同時期の造営もしくは造営主体が存在すると推定できる古墳は現状では以下の4基である。滋賀県長浜市「姫塚古墳」・岐阜県大野町「北山古墳」・三重県松阪市「向山古墳」・愛知県安城市「桜井二子古墳」。

一つ目は北近畿への窓口でもある近江湖北地域。濃尾平野とは鉄の路ともいえる「八草峠」を介してつながる地域であり、古くからの北近畿・日本海沿岸部との交流の大動脈といえるルートと考えることができる。律令期の東山道ルートは「不破」から「大野」であり、明らかに近江から関ヶ原を経て、という流れが文化の道であるかのごとく語られてきた。しかし弥生時代から古墳時代にかけてはこうした近江からの流れより、さらに遡りかつ重要な文化の道が存在する。それは近江「湖北」から揖斐川水系を抜け濃尾平野北部に至る「路」であり、現在の国道303号線、「方縣」（岐阜市）から「大野」を経て八草峠「伊香郡」に至り若狭地域に向かう路である。北近畿地域と濃尾平野とは弥生時代後期「三遠式銅鐸」の分布や土器様式の交流、さらには現代にいたる「方言の共通点」など、文化の流れの基調として、古くから存在する重要な物流網でもあることは明らかである。東山道の美濃領域の「路」は、まさにこの古くから存在する「北近畿路」をベースに整備されたと想定したい。この路はさらに日本海から北近畿、大陸系の文物流入ルートをも射程に入れることができる。現在の長浜市、旧高月町・木之本町を中心とした「伊香」という領域、そこに古保利古墳群を代表とする前方後円（方）墳が造営されている。代表的な前方後方墳としては3世紀前半期に遡るであろう60メートルクラスの小松古墳や大森古墳など注目すべき3世紀代の大型古墳群でもある。その中で特にここでは平野部に造営された80メートルの前方後方墳「姫塚古墳」に注目し、前方部が著しく低く平坦であり次の述べる上磯古墳群北山古墳との関係を指摘しておきたい。

二つ目の地域は美濃大野町、上磯古墳群。ここには笹山古墳からはじまるであろう前方後方墳集中造営地として注目すべき場所が存在する。中でも東之宮古墳との関係において前方後方墳北山古墳がとても興味深い。北山古墳は主軸線が東之宮古墳と同様に冬至の日の出軸と一致している点は注目しておきたい。因みに南山古墳93．3メートルと北山古墳83メートルの前方後方墳が冬至・夏至の軸線を共有する。また上磯古墳群からは多くの倭鏡が出土しているが、現状において三角縁神獣鏡は確認されていない。おそらく3世紀第三四半期において東海地域最大規模を誇る前方後方墳造営地である事は動かないと思う。

三つ目は倭王権との反乱伝承をもつ地域。現在の三重県松阪市、旧嬉野町を中心とした地域であり、雲出川下流域。ここは古くから「アザカ」国と呼ばれ、猿田彦を崇める一族が割拠した場面でもある。前方後方墳が中村川流域に密集し、庵ノ門1号墳・西山1号墳・筒野1号墳・錆山古墳とほぼ40メートルクラスの前方後方墳が造営され、最大規模を誇る前方後方墳82．2メートルの向山古墳の造営に至る。東之宮古墳と同時期の古墳は、おそらく東之宮古墳と類似する獣形文鏡が見られる筒野1号墳であろう。なおこれらの古墳群

図９　東海の六部族（地図は電子国土web地図）



の造営主体は中村川水系の下之庄東方遺跡・片部貝蔵遺跡であり、北陸・近江・近畿など多方面からの土器の出土に加え、伊勢湾沿岸部の部族社会の重要なアイテム「S字甕誕生地」としても大変重要な場面である。

四つ目の地域は矢作川中流域である御河国、碧海「桜井」地区。ここには68・2メートルの前方後方墳桜井二子古墳と、前方後円墳であるが65メートルの姫小川古墳が造営されている。ほぼ同時期の造営という評価であるが、それぞれ「古井遺跡群」「姫下・下懸遺跡群」を背景とする小地域社会にまとまるようであり、上記したアザカ国と同様に近畿・北陸等の多方面の土器等の出土が確認されている。ここは「ハズの海」を介した伊勢の海路との湊港的な場面ともいえよう。

3.3　味蜂間の海

以上の4つの地域社会と犬山扇状地の「邇波」。つまり前方後方墳72メートルの東之宮古墳を中心とする木曽川水系中流域の地域社会を含めて、5つのまとまりある部族社会を想定することができる。そして最後の六番目の地域は中島・海部の「味蜂間の海」を介する海抜ゼロメートルの領域を考えておきたい。ここには70メートルクラスの前方後方墳は現状では見られない。しかし一宮市萩原遺跡群は廻間様式の中核的集落遺跡群と考えて良い。つまり東海地域の2・3世紀の土器様式を概観していくと、その情報発信源は濃尾平

野低地部ととらえてよく、そこには伊勢湾北部域に大きく入り込む「味蜂間の海」が存在し、その周辺部に展開した集落遺跡こそが2・3世紀における伊勢湾沿岸部の社会文化的な中核的場所であったと考えることができる。ただその実態は未だ不明確でもあり本格的な調査を待つ必要があろう。すくなくとも「味蜂間の海」周辺部をまとまりある一つの部族社会と考えることは許されるものと思う。因みにこの空域は、反乱伝承「悪神」と「島田県主」が関与した領域でもある。

ここに大型の前方後方墳が存在しない理由を、一つの幻想ではあるが、大部族連合の中核的な集団（味蜂間の海）が、247年狗奴国抗争を契機に、アザカ国を介して、おおやまと地域（特に前方後方墳が集中する大和古墳群）に移動したと想定することもできる。その場合その目的は、初期倭王権誕生への参画である点は見据えておく必要があろう。

3.4 冬至軸をもつ古墳

以上のように、ここでは大雑把ではあるが東之宮古墳の内容を基軸として、その時代の東海地域を概観してきた。結果1．東之宮古墳の被葬者が活躍した3世紀中頃から後葉にかけて、70メートルクラスの前方後方墳が東海地域に造営されはじめた。同時に地域社会が切望した「ある使命」に基づき、遂行した指導者に対して、富の動員が実行され、過大な栄誉（伝説）と記念碑的な墳墓の構築を実現した。2．特に木曽川中流域では、二つの集団（鵜沼古市場遺跡群・余野遺跡群）を核としたまとまりを基軸に東之宮古墳が造営され、犬山扇状地北部域に誕生するとともに、それに呼応するように周辺の地域社会においても60メートルクラスの前方後方墳が次々に造営された。3．またこうした時期（廻間Ⅲ式期前半）に70・80メートルクラスの前方後方墳が東海地域各地で造営を開始する。その地域社会としてのまとまりを6つの地域で把握することができた。湖北地域・西濃北部地域・犬山扇状地・矢作川中流域・雲出川下流域、そして廻間様式の中心的な味蜂間の海。これをここでは東海の六部族と呼んでおきたい。かつて伊勢湾沿岸部大部族連合と記載したがその具体的な内容でもある。

2・3世紀の伊勢湾沿岸部の地域社会を一言でまとめると、濃尾平野低地部で誕生した「廻間様式」を共有しつつ、小部族間の地縁的絆を基軸とする社会であった。指導者は前方後方墳に奉られ、治水や低地・湿地開発に果敢に挑んだ技術力と、河・海・湿原の物流に精通しあるいは整え地域社会を造り上げてきた。北近畿・北陸や中部高地にネットワークを持つ。東之宮古墳や北山古墳、大森古墳、あるいは姫小川古墳に代表される冬至の主軸線にあわせるように造営された思想からは、弥生文化以来の地域的伝統、部族社会に内包する神話的絆が強く残存し、それを好しとする伊勢湾沿岸部の多くの地域社会のまとまりをあらためて類推することができる。

参考文献

斎藤 忠 1978「弘法山古墳出土の鉄斧とその機能」『弘法山古墳』松本市

2005『愛知県史資料編3』古墳考古3

赤塚次郎編 2005『史跡東之宮古墳調査報告書』犬山市埋蔵文化財調査報告書第2集

赤塚次郎 2009『幻の王国 狗奴国を旅する』風媒社

木下 良 2010『辞典 日本古代の道と駅』吉川弘文館

長江真和 2012『山神古墳・桐野1号古墳』可児市埋文調査報告44

渡邉樹・鈴木康高・森下章司編 2014『史跡東之宮古墳』犬山市埋蔵文化財調査報告書第12集

高野陽子 2015「丹後・東海地方をめぐる土器の交流」『丹後・東海地方のことばと文化』平成26年度丹後・東海地方の文化方言等調査事業報告書 京丹後市教育委員会

赤塚次郎 2015「青銅器文化から観えてくる北近畿・東海地方の交流」『丹後・東海地方のことばと文化』平成26年度丹後・東海地方の文化方言等調査事業報告書 京丹後市教育委員会

2017『愛知県史通史編1』原始・古代

赤塚次郎 2017「古代邇波の領域とその基層文化について」『邇波』NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク研究紀要 4号

赤塚次郎 2018『東之宮古墳』シリーズ「遺跡を学ぶ」130、新泉社

犬山市・宮裏池採集の灰釉陶器について

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
大塚　友恵

はじめに

NPO法人ニワ里ねっとでは、「文化遺産の見えるまちづくり」活動として地域に残る文化遺産の悉皆調査を行っている。悉皆調査をするにあたって、ニワ里ねっと会員や地元住民の方から情報をご提供いただくこともしばしばである。平成28年冬、地元住民の方より犬山市字宮裏の宮浦池周辺で陶器片を採集したとの情報をいただいた。埋蔵文化財包蔵地として登録のない地点であり、新規の遺跡が存在する可能性が考えられた。そこで、平成30年11月に周辺の現地踏査を行った結果、灰釉陶器・窯道具などをまとまって採集することができ、新たな窯跡の存在が想定された。本稿では、宮裏池周辺での現地踏査と採集遺物について報告し、今後の研究の展望を述べたい。

現地踏査の報告

遺物採集地点の立地と周辺の遺跡

犬山市の東部エリアには130～200mの丘陵地帯（愛岐丘陵とも呼ぶ）が広がっており、丘陵に複雑に入り組んだ谷地形を利用して、数多くの灌漑用ため池が造られている。今回遺物を採集した地点は、犬山市字宮裏に所在し、東部の丘陵内の北東方向へ延びる谷の最奥部にある宮裏池に位置している。池の築造時期は分からなかったが、明治時代の地形図には記載されていることから明治以前に築造されたものであることは確実である。遺物は、宮裏池の北東斜面の池岸を中心に散布していた。

この犬山東部の丘陵地帯は、北には各務原市、東には岐阜県可児市・多治見市、南には小牧市・春日井市へと連なっており、それぞれの地域では古くから窯業生産が盛んに行われていたことが分かっている。小牧市から春日井市にかけては、小牧市篠岡地区を中心に、古墳時代から中世まで操業した「尾北窯」と呼称する窯跡群が形成されている。東に隣接する可児市・多治見市は、古代から近世に至るまで連綿と窯業生産が行われており、土岐市・瑞浪市に分布する窯跡群と合わせて「東濃窯」と呼称されてる。また北に位置する各務原市では、須衛地区を中心に関市・岐阜市またがって古墳時代から中世までの窯跡が分布しており「美濃須衛窯」が形成されている（図1）。犬山市域の丘陵一帯にも周辺地域と同様に、複数の窯跡が塔野地・前原・今井・八曽の山中にかけて分布していることが『犬山市史』や『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』などに報告されている。犬山市域の窯跡を図2に示した。これらの窯跡の多くが未調査で詳細が不明であるが、宮裏池の西に位置する堂ヶ洞古窯群（赤坂古窯群）は、古代の窯跡では唯一発掘調査が行われている。10基近くの窯跡が存在したとされ、そのうち3基が発掘調査され、9世紀後半～10世紀前半の灰釉陶器の窯であることが分かっている。

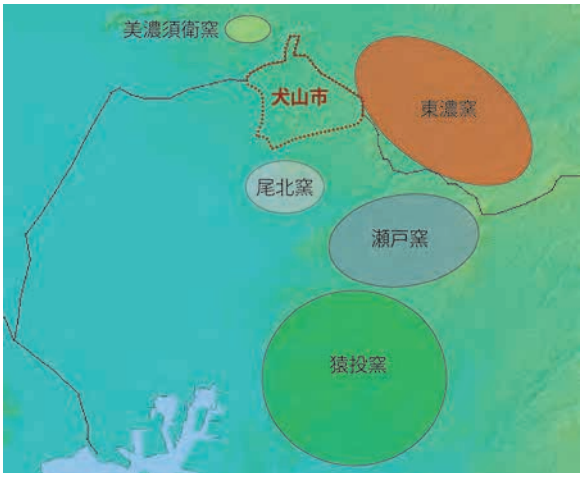


図1　周辺の窯業生産地

採集地点の現況（写真1・2）

遺物は、宮裏池北東斜面の池岸を中心に採集できた。遺物が3箇所（地点1～3）に分かれて集中しており、複数基の窯跡が存在した可能性も考えられる（図3）。地点1では、約1．5mの幅で黒い灰層が広がっており灰原の一部が残存していると想定される。池底に向かって傾斜面

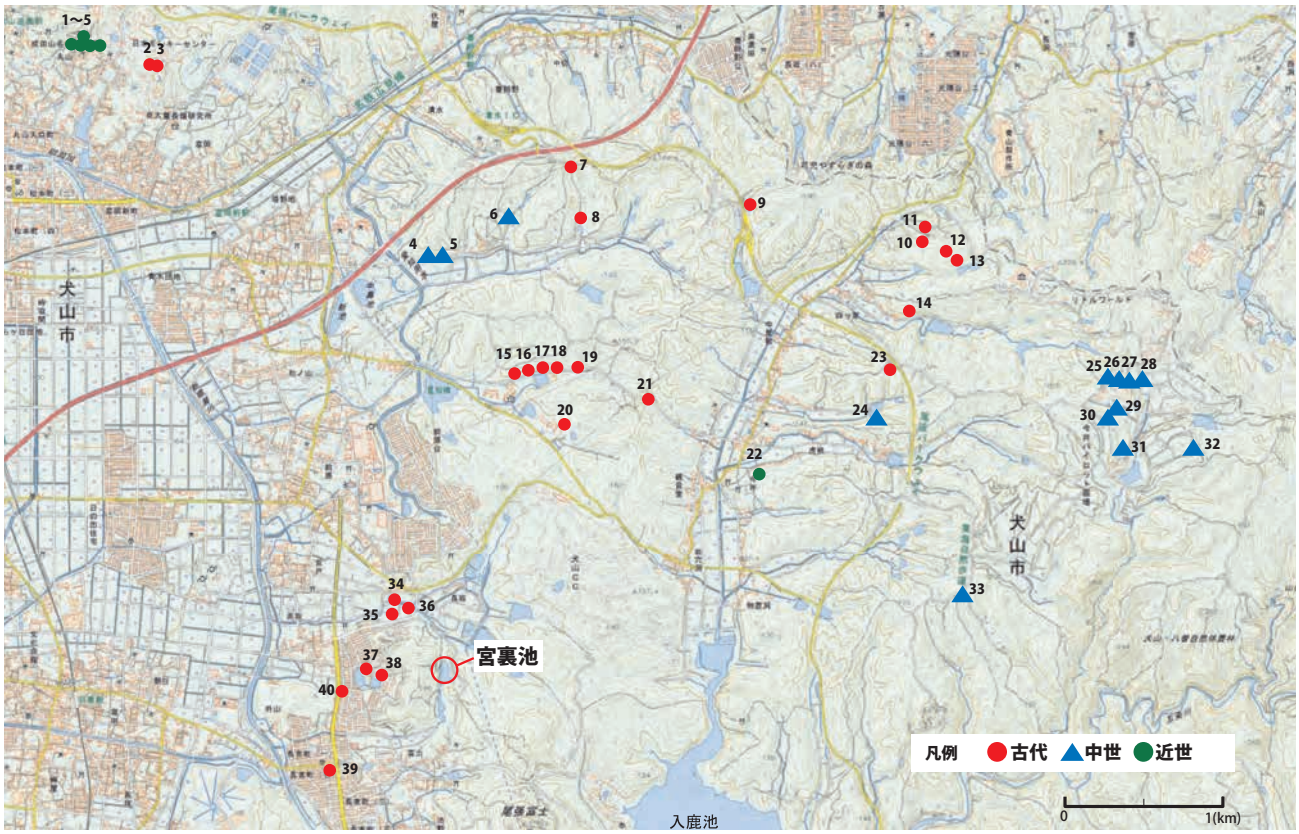


図２　犬山市域の窯跡分布図
（国土地理院電子地形図に加筆。遺跡名はマップあいち・愛知県文化財マップ（埋蔵文化財・記念物）を参照。）

１～５)丸山１～５号窯　２・３)官林１・２号窯　４・５)田口洞1・２号窯　６)二ノ洞古窯　７・８)片平池１・２号窯　９)喜八洞古窯　10～13)割洞池１～４号窯　14)平内洞古窯　15～18)橋爪池１～４号窯　19)中峠１号窯　20)明治池古窯　21)白山洞池１号窯　22)宮ケ洞古窯　23・24)祢宜洞１・２号窯　25～30)一ツ橋西１～６号窯　31)亀割古窯　32)一ツ橋古窯　33)安大寺古窯　34～38)赤坂１～５号窯　39・40)富士１・２号窯

が残っており、遺構の一部が残存していると考えられるが、岸から約３m上には道路が通り斜面が削平されているため、窯本体はすでに滅失してしまっている可能性もある。

採集遺物の紹介（図４）

採集した遺物は全59点（地元住民の採集品も含む）で、器種には椀類・皿類・瓶類・壺蓋・焼台がある。採集遺物の一覧を表１に示した。陶器類は灰釉のない小破片もあるが、ほぼすべて灰釉陶器片である。破片資料が多いため、口縁部もしくは高台部の径が１/８以上残存するものを極力図化した。可能なものは反転復元し、中心線を結節せず区別している。

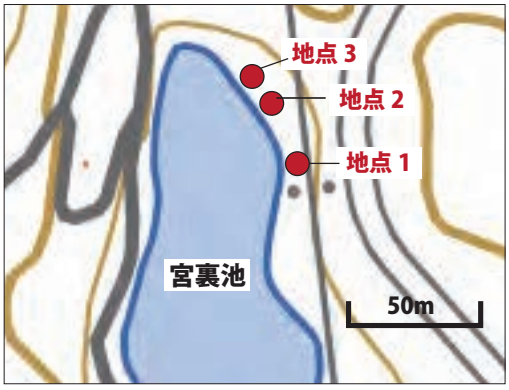


図３　遺物採集地点位置図
（国土地理院地図電子国土webに加筆）

【灰釉陶器】椀類（1～22、29）

高台部のみ、もしくは口縁部のみの部分的な資料が大半だが、点数としては最も多く採集できた。体部が残っていないものが多く、皿類と区別できないものもある。

椀類は高台径５cm以下の小椀（29）と、それ以上の椀に分けられ、椀は調整技法や高台の形状から、A類（1～18）とB類（19～21）に細分できる。A類は底部・体部に回転ヘラ削りもしくは回転ナデが施され、B類は回転ヘラ削り・回転ナデ調整が施されず、底部には糸切り痕が残る。A類は地点１に集中し、B類は地点２のみで採集されている。

椀A類は、内外面に施された灰釉が黄緑色を呈し、焼き締まりも良好なものが多い。直接重ね焼きされた痕跡がみられ、ハケ塗りと想定される資料も存在する。高台は内湾し接地面を尖らせて外側を屈曲させた三日月状をしているが、高台が細く外側の屈曲が強いものと、低く内湾

写真１　宮裏池（南方向から）

写真２　遺物採集地点２付近

が緩くて台形に近いものがある。前者の方が全体的に調整が丁寧で灰釉の発色も良く、時期差があるのかもしれない。17・18は口縁部のみであるが、胎土や灰釉の発色具合などからＡ類となるであろう。椀Ｂ類は、回転ヘラ削り・ナデ調整が施されていないため器壁が厚く、底部には糸切り痕が残る。また浸けがけによって内外面に灰釉を施してあるが、発色不良である。高台は低く三角形状で粗雑なつくりである。19は口縁部に指押しが施される輪花椀。22は高台の形状から深椀と考えられ、回転ヘラ削り・ナデ調整がみられるためＢ類からは外したが、外面に施された灰釉が発色をしていない。

【灰釉陶器】皿類（23・24）

皿と断定できるのは口縁部の資料のみである。灰釉は黄緑色に発色しており、23は口縁部周辺にハケ塗りで灰釉が施されている。

【灰釉陶器】瓶類（25～28、31・32）

25～28は底部のみで全体の形状は把握できないが、高台の形状などから長頸瓶の底部と判断した。低く外に張り出す高台で、底部は回転ヘラ削りされたままのものと、削りがナデ消されているものとある。外面に灰釉が施され、部分的に釉が瑠璃色を呈している箇所もある。31・32は小瓶で、どちらも外面に灰釉を施し、釉が溜まった厚い部分では瑠璃色から乳白色を呈す。32の底部には糸切り痕が残る。

【灰釉陶器】壺蓋（30）

小片ではあるが、口縁部の取り付けなどから壺蓋と判断した。地点１で１点のみ採集されている。外面全体に灰釉が薄くかかる。

【窯道具】焼台（33）

地点１で１点採集した。高台の圧痕から椀の焼成用とみられる。上面には植物繊維の圧痕がみられる。

以上、採集遺物の所見を述べた。これらの採集遺物を、『愛知県史』（別編　窯業）により示された編年（註１）に当てはめると、大きく２時期に分けることができる。地点１を中心に採集された椀Ａ類、皿類、瓶類などは、９世紀後半のＫ－90号窯式期後半（註２）におおよそ位置づけられる。ただ、椀Ａ類には灰釉の発色具合や高台の形態が異なる資料があり、時期が下るものが混在していることも考えられる。尾北窯ではＫ－90号窯式期とＯ－53号窯式期の遺物が共伴するのが一般的であることが指摘されており、同様な状況を示しているのかもしれない。地点２のみで採集された椀Ｂ類は、灰釉が発色していないことや粗雑な作りから、百代寺窯式期に相当し11世紀前半頃と想定される。地点ごとに時期の異なる遺物が集中することから、複数基の時期の異なる窯が存在している可能性がある。

３．おわりに

東海地域の灰釉陶器生産は、９世紀前半から猿投窯を中心として本格的に開始される。尾北窯でも９世紀前半には生産が始まり、９世紀後半には最盛期を迎える。東濃窯では９世紀後半から灰釉陶器生産が開始されることが分かっている。今回報告した採集遺物から、犬山市域でも９世紀後半段階にはすでに灰釉陶器生産が行われていたことが明らかと

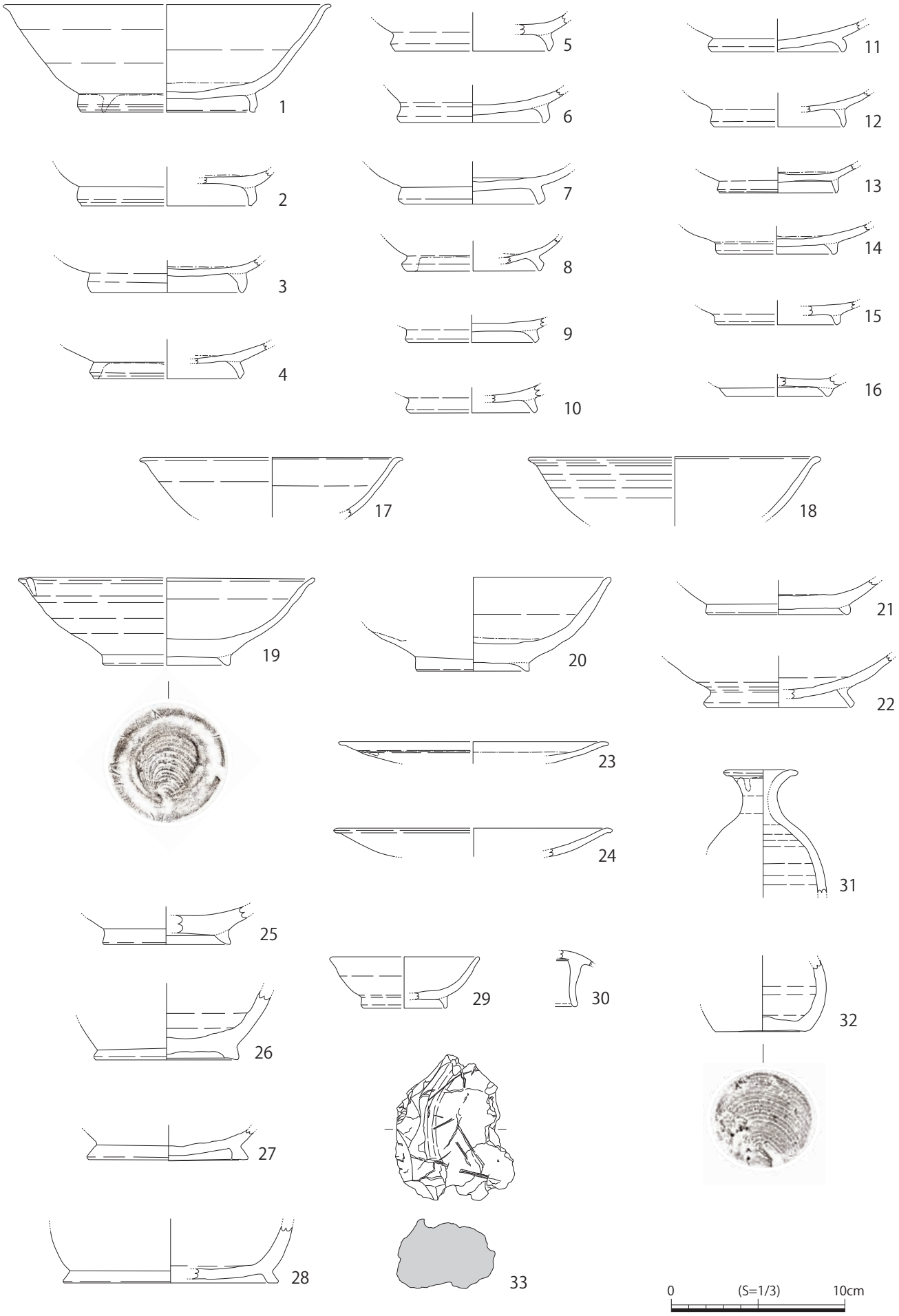


図４　宮裏池周辺採集遺物

なった。

尾北窯と東濃窯、２つの古窯跡群の間に位置する犬山市域の窯跡群は、尾北窯の一端として捉えられる場合もあれば（註３）、東濃窯の一端として捉えられる場合もあり（註４）「どっちつかず」の状態である。本報告の採集遺物は尾北窯のものと大差ないようにみえる（註５）が、今井地区で採集された灰釉陶器に関して器壁の薄さなどから東濃窯との関連も示唆されており（註６）、検討を要する。また東部丘陵山中で採集できる山茶碗片もいわゆる「東濃型」と呼ばれる薄手・均質な胎土のものが多いと感じている。今後は周辺古窯跡群の資料と比較検討をすることで、当地域の窯業生産地としての位置づけを考えていきたい。

最後に、本報告を作成するにあたって、中嶋 隆氏には現地踏査にご同行いただき、現地状況、採集遺物の所見に関してご教示をいただき来ました。記して深謝いたします。

【註】

註１：愛知県史編さん委員会 ２０１５『愛知県史』別編 窯業 １古代 猿投系 愛知県

註２：愛知県下における須恵器・灰釉陶器の編年は、その時期を代表する窯跡名を時期名に冠して表す窯式編年が一般的となっている。Ｋ－90号窯式期は９世紀後半、Ｏ－053号窯式期は10世紀前半、Ｈ－72号窯式期は10世紀後半、百代寺窯式期は11世紀前半におおよそ相当する。

註３：斎藤孝正 １９９５「Ⅰ 東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第３巻東日本 Ⅰ 雄山閣

註４：山内伸浩 ２００８「東濃地域における灰釉陶器・山茶碗生産の一様相ー窯の分布とその変遷からの視点ー」『日本考古学協会２００８年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会２０００８年度愛知大会実行委員会

註５：中嶋 隆氏より、採集遺物の瓶類などで見られる瑠璃色に発色する灰釉の状況は尾北窯の特徴の一つとご教示いただいた。

註６：大西 遼 ２０１９「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅱ－猿投窯東山地区及び尾北窯出土須恵器・瓷器の考古学的調査（付）美濃・伊勢の窯跡出土須恵器－」『愛知県陶磁美術館 研究紀要24』愛知県陶磁美術館

【参考文献】

犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会 １９８３『犬山市史』史料編３ 考古 古代・中世 犬山市

愛知県教育委員会 １９８３『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）』愛知県教育委員会

表１　宮裏池周辺採集遺物　一覧

番号	器種	法量	採集地点	図版番号
1	椀	口径19.0cm、高台径10.1cm 、器高6.2cm	1	1
2	椀	高台径9.8cm	1	2
3	椀	高台径8.6cm	1	3
4	椀	高台径8.9cm	1	5
5	椀	高台径8.4cm	1	22
6	椀	高台径7.8cm	1	8
7	椀	高台径7.4cm	1	9
8	椀		1	
9	椀	高台径7.6cm	1	12
10	椀	高台径6.7cm	1	13
11	椀	高台径7.4cm	1	10
12	椀	高台径8.2cm	2	6
13	椀（輪花椀）	口径17.2cm、高台径7.3cm、器高5.0cm	2	19
14	椀		2	
15	椀	高台径8.0cm	2	21
16	椀	口径15.9cm、高台径6.5cm、器高5.4cm	2	20
17	椀	高台径8.4cm	3	4
18	椀		3	
19	椀	口径15.3cm	3	17
20	椀	高台径7.9cm	―	7
21	椀	口径16.9cm	―	18
22	椀	高台径7.6cm	―	11
23	椀皿類	高台径5.9cm	1	16
24	椀皿類	高台径6.9cm	1	15
25	椀皿類	高台径6.7cm	1	14
26	椀皿類		1	
27	椀皿類		1	
28	椀皿類		1	
29	椀皿類		1	
30	椀皿類		1	
31	椀皿類		1	
32	椀皿類		3	
33	椀皿類		3	
34	椀皿類		3	
35	椀皿類		3	
36	椀皿類		3	
37	椀皿類		―	
38	小椀	口径8.7cm、高台径4.8cn、器高3.0cm	1	29
39	皿類	口径16.2cm	3	24
40	皿類		3	
41	皿類	口径15.7cm	3	23
42	台付長頸瓶	高台径7.4cm	1	25
43	台付長頸瓶	高台径9.3cm	1	27
44	台付長頸瓶	高台径8.3cm	1	26
45	壺瓶類	高台径12.4cm	1	28
46	小瓶	底径5.9cm	1	32
47	小瓶	口径4.3cm	―	31
48	小瓶		―	
49	瓶類		1	
50	瓶類		1	
51	瓶類		1	
52	瓶類		1	
53	瓶類		3	
54	瓶類		3	
55	瓶類		―	
56	壺蓋		1	30
57	焼台		1	33
58	不明		1	
59	不明		1	

下流地域における「入鹿切れ」供養塔・供養地蔵について

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
近藤　健一

はじめに

ニワ里ねっとでは、地域における災害史の調査研究および情報発信に取り組んでいる。1868年（慶応4年・明治元年）に発生した入鹿池の決壊事故、いわゆる「入鹿切れ」から150年を迎えた2018年（平成30年）には、科学的調査を含む様々な事業を行った。会員である筆者もこの災害に関心を持ち、私的に文献やインターネットで調査を進めたが、その過程で、犠牲者を供養するために建てられた石塔や石仏が、五条川の下流域にも複数存在することを知った。人的被害が甚大であった現在の犬山市と大口町の領域においては、供養塔や供養地蔵の存在は早くから知られ、すでにいくつかの文献にまとめられている（註1）。しかし下流地域に存在するものについては、現状では広く知られているとは言い難い。そこで今回、現地調査の成果を踏まえ、まとめて紹介したいと思う。

1．宮重の供養塔（供養塚）（図1の1、写真1・2）

所在地：清須市春日宮重町
現況：青木川との合流点から250mほど下った五条川の左岸、緑地の一角に1基の石塔が立っており、その傍らには「入鹿の大水供養塚」と題した説明板がある。石塔は方柱形で、高さは83㎝。銘文は、
正面「南無釋迦牟尼如来」
背面「戊寅年建之 一宮市 小野島新二」
となっている。建立年の「戊寅年」については、一宮市は1921年に成立していること、1988年に刊行された文献（註2）に本石塔について記載があること、以上の2点から、入鹿切れ70年後の1938年（昭和13年）にあたると考える。また隣に立てられた板塔婆には、表「大圓鏡智為宮重町水害災難死者諸精霊位有縁無縁三界萬霊塔」裏「（梵字）令和元年十一月十四日　功徳主　宮重町総代一同　合掌　建之」と記してある。ここ宮重地区における入鹿切れ当時の状況およびその後の経緯について、文献（註2）では以下のように記述されている。

「明治元年、入鹿の大水があったとき、当地区の北端から二〇〇メートルほどの上流にある五条川と青木川との合流地点では、満水のため地区側の堤防が決壊し、その濁流は、落合・蓮花寺地区を下り下之郷へ、さらには阿原（新川町）へと至り、東南に当たる水田地帯全域を、一面の白海に化したと伝えられている。当時は入鹿方面の被害も甚大で、

図1　位置図（1：宮重の供養塔）

写真1　五条川・青木川合流点を望む

写真2　宮重の供養塔

多数の水死体が流れ着いたため、ムラでは大きな穴を掘って、懇ろに埋葬した。」

その後、供養塚と呼ばれた埋葬地に「戊寅年（昭和十三年）に寄進された石塔」すなわち本石塔を建てたという。ただし埋葬地については、現在の石塔の位置とする記述と、本来は100mほど北にあり、県道の拡張や土地改良に伴い塚を現在地へ移したとする記述の二通りがあって判然としない。宮重地区では現在も、毎年11月にここで水死者供養を執り行い、犠牲者の霊を慰めている。

2．下之郷の供養塔（図2の2、写真3）

所在地：清須市春日社子地（下之郷地区）

現況：春日小学校の南東にある下之郷地区共同墓地内の、無縁墓が寄せてある一角にひときわ背の高い石塔がある。高さ約170cmの方柱形の石塔で、上部は五輪塔の形状をしている。銘文は、

正面「三界萬霊」

背面「入鹿大供水□□十三霊之墓

名古屋市　吉川卯助」（□□は未判読）

となっている。建立年代は不明だが、名古屋市が成立した1889年（明治22年）以降の建立とみられる。この石塔については文献に「入鹿大水無縁仏供養塔」と題して写真が載っており（註3・図3）、同じ頁で入鹿切れについて以下のように記す。

「この大水で下之郷には浸水家屋が多数出たし、水田は見わたす限りの白海となり、下之郷の五条川堰球に流れついた死人が八体もあった。これらの死体は下之郷の墓地に埋葬され、今でもその時の墓標がたてられている。」

文中の「墓標」は本石塔を、「五条川堰球」はここから700mほど南に現存する「下之郷堰」（写真4）を指すとみられる。下之郷堰の付近に多くの死体が漂着したとする記述は、複数の戦前期の文献（註4）にも見え、入鹿切れにまつわる出来事として人々に強く記憶されていたことがうかがえる。

図2 位置図
（2：下之郷の供養塔、3：下之郷の供養地蔵）

3．下之郷の供養地蔵（図2の3、写真5・6）

所在地：清須市春日冨士塚（下之郷地区）

現況：五条川左岸堤防上に辻堂があり、その中に石仏が安置されている。この場所にはかつて定井橋という橋が架かっていたようであるが、現在は数十m下流に付け替えられ、名称も春日橋となっている。更に60m下流には先述の下之郷堰があるが、洪水対策のため撤去が計画されているという。石仏は2段に積んだ台石の上に立つ地蔵菩薩立像で、本体の高さ60cm、台石を含めた総高が約90cm。

銘文は、

台石上段正面「右　こんひら

西　かうの宮」

となっており、道標を兼ねている。このほか香台に「わたや仙七」との銘があるとされる（註3）が確認できなかった。建立年代は不明。この地蔵は、入鹿切れによって流れ着

写真3　下之郷の供養塔

写真4　下之郷堰を下流側より

図3「入鹿大水無縁仏供養塔」（註3）

写真５　川べりに建つ地蔵堂

写真６　下之郷の供養地蔵

いた死者の供養のために建てたと言い伝えられており、毎年1月には有志によって水死者供養が営まれているという（註２・図４）。この行事が現在も継続しているかは不明であるが、のぼり旗や供花を見るに、信仰は続いているようだ。

図４　水死者供養（昭和62年）（註２）

４．上萱津の供養塔（図５の４、写真７）

所在地：あま市上萱津正法寺東

現況：五条川右岸堤防上にある墓地内の、無縁墓が寄せてあるひな壇の隣に、１基の石塔が立っている。墓地は関係者以外の立ち入りが禁止となっているが、今回管理者に許可をいただき、特別に調査することができた。石塔は方柱形で、上部は五輪塔の形状をしている。現状で１２０cmの高さがあるが、下部が埋まっており、過去の写真（註５・図６）との比較から本来の高さは１７０cmほどとみられる。銘文は、

正面「三界萬（霊）」

背面「入鹿大供水□□二霊之墓」

となっている。□□の部分は未判読だが、下之郷の供養塔（本稿２）の未判読部分と同一内容とみられる。建立年代は不明であるが、石塔の大きさ・形状、銘文の文面・書体のいずれもが下之郷の供養塔とよく似ていることから、同供養塔と近接した時期に建てられたのではないかと考える。本石塔の来歴について複数の文献（註６）の記載を総合して述べると、入鹿切れ当時、五条川の上流から流れ着いた死体が、上萱津地区南部の河川敷にあった真宗門徒の墓地に埋葬され、無縁仏を供養する石碑が建てられた。その後１９９６年（平成８年）、名古屋市の焼却場建設に伴う河川改修のため、墓地は３００ｍほど離れた堤防上に移転した、という。また『甚目寺町の石造美術』（註７）には、「三界万霊入鹿大洪水没二霊墓　上萱津若衆組中」という銘文を持つ供養碑が存在する

図５　位置図（４：上萱津の供養塔）

図６「上萱津六地蔵」より（註5）

写真７　上萱津の供養塔（非公開）

旨が記載されている。所在地が上流に数百m離れた萱津定井（旧・法界門堰の異称）となっているため検討を要するものの、本石塔のことを指している可能性がある。

5．五明の地蔵（図7の5、写真8）

所在地：江南市五明町青木

現況：本件については五条川ではなく支流青木川の流域である。名鉄布袋駅の西700mほどの住宅街に、曹洞宗の寺院・道音寺がある。山門を入ると左手に石仏が6体並んでいるが、そのうち左端（南端）にあるのが今回取り上げる地蔵である。2段に積んだ台石の上に立つ地蔵菩薩座像とみられるが、顔面が剥離するなど風化が著しい。本体（蓮台を含む）の高さ57㎝、総高約105㎝。説明の札には「文久二年」とあるものの、実際の銘文は以下の通りである。

台石上段正面「以十方ノ志像立
爲水死群霊佛杲菩提」
同　右面「慶應四年辰五月十四日
世話人中」

この地蔵は少なくとも30年以上前の時点で境内にあった（註8）が、詳しい来歴は不明である。ただし銘文に、水死者の霊を弔う文面および、入鹿切れの発生日すなわち犠牲者の命日が含まれるところから、入鹿切れ犠牲者の供養地蔵として建てられた可能性を指摘するものである。ちなみに入鹿切れ当時、ここ五明地区まで水が押し寄せたとする記録や聞書きなどは見つかっていない。

図7　位置図（5：五明の地蔵）

写真8　五明の地蔵（道音寺境内）

おわりに

入鹿切れ当時、下流地域に多くの水死体が流れ着いたことは、数日後に清須代官の名で出された触書（註9）などの同時代史料によって知られ、またそれを伝える聞書きも数多く残されている。しかし、死者がどこでどのように埋葬され、その後地域の人々がこの出来事とどのように向き合って来たのか、ということについてはよく分かっていない。今回の調査で判明した供養に関わる石造物や行事の存在は、その一端を浮かび上がらせるものであると考える。今回は、文献によって手掛かりが得られたものを取り上げたが、他にも同様の事例が存在する可能性は高く、継続した調査が必要である。もしこのような石造物や行事などについてご存じの方がいれば、情報をお寄せいただけると有難い。

最後に本稿の執筆にあたり、次の皆様のご協力を賜りました。記して深く感謝の意を表します。（敬称略・五十音順）

あま市美和歴史民俗資料館
大塚友恵
無量壽苑墓地管理組合

【註】
註1：入鹿池史編纂委員会、1994、『入鹿池史』
舟橋昭治、2013、『入鹿池の築造と「入鹿切れ供養地蔵」について』
註2：春日村史編集委員会、1988、『春日村史』現代編
註3：春日村史編さん委員会、1961、『春日村史』
註4：川口庄一、1915、「井之口雑記　巻一」『新修稲沢市史』資料編四　地誌上
市橋鐸麿、1931、『入鹿切聞書』
註5：甚目寺町教育委員会、1986、『地蔵と信仰　甚目寺町文化財報告書Ⅲ』
註6：武藤尚武、2015、『尾張鎌倉街道萱津昔語り』、註5の文献
註7：甚目寺町教育委員会、1980、『甚目寺町の石造美術』
註8：五明区史編纂会、1987、『五明区史』
註9：一宮市、1969、『新編一宮市史』資料編九
清須市新川町史編さん委員会、2008、『新川町史』通史編

【参考文献】
1：新修稲沢市史編纂会事務局、1982、『新修稲沢市史』資料編四　地誌上
2：春日村史編集委員会、1988、『春日村史』資料編

西南戦争で戦死した 仙石庄之助の足跡を訪ねて

（栗栖村出身）

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
服部　哲也

写真1　栗栖神社の忠魂碑と英霊塔

はじめに

犬山市栗栖に所在する栗栖神社の鳥居横に「忠魂碑」と「英霊塔」が建つ。平成29年2月4日、戦跡遺跡を調査する伊藤厚史氏に同行し、何気なく忠魂碑裏面を見て驚いた。そこには「明治拾年於西南戦争戦死故陸軍歩兵一等卒　仙石庄之助」と刻まれていたのである。「西南戦争で戦死!?」。征韓論に始まる士族の不平の高まりが、西南戦争で終結する明治政府初期の混乱の歴史は、多少知ってはいたものの、遠く九州で行われた西郷どん（西郷隆盛）の戦いに、この栗栖から出征した兵士がいたとは思いもよらなかったのである（註1）。

仙石庄之助の出兵

仙石庄之助の名前は『靖國神社忠魂史・西南の役』にて確認することができる。「西南の役　第三章　正面軍の進撃　第三節　山鹿方面の戦闘」の戦死者名の中に「第三旅　名鎮歩六聯一大三中　明治一〇・三・一二　山鹿郡鍋田　兵卒　仙石庄之助　愛知」と記載されていた。名古屋鎮台歩兵第六連隊第一大隊第三中隊に所属し、明治10年3月12日に現在の熊本県山鹿市鍋田で戦死されたのである。

仙石庄之助が所属した名古屋鎮台第六連隊第一大隊（総兵686人）は、2月21日に出動の命が下り、三浦梧楼少将率いる第三旅団に編せられた。第六連隊の中では最も早い征討軍への参入であった。神戸を経由し船にて2月25日には筑前博多へ上陸。仙石庄之助にとっては初めて九州の地であったであろう。それは陸軍の総司令官である山形有朋参軍の上陸とも同日であった。すぐさま、熊本に向かって豊前街道を南下。筑後久留米・肥後南関を経て、3月10日には豊前街道沿い肥後山鹿の岩村に入る。旅団本部は村内の光行寺に置かれた。同時に、それまで当地で戦っていた連隊を合わせて、第3旅団を再編成。対峙した薩摩軍兵力約2千名をはるかに凌駕する約三千五百名の大部隊となったのである。そして3月12日、仙石庄之助は大部隊の一兵士として戦いに臨む。

写真2　仙石庄之助の出で立ち
（鎮台兵の制服・装備）
※熊本市田原坂西南戦争資料館の展示より

ここに至るまでの西南戦争

明治10年2月15日、薩摩軍は西郷隆盛を総司令官として挙兵、鹿児島より進軍を開始する。19日には「鹿児島賊徒征伐」の勅令が政府に下

図1　主要街道と激戦地位置図

り、有栖川宮熾仁親王を征伐総監として、反乱軍鎮圧に行動開始。乃木希典（後の陸軍大将）率いる小倉歩兵第十四連隊を熊本鎮台（熊本城）に援軍に向かわせるとともに、急いで旅団を編成し続々と九州に派兵する。22日、薩摩軍は熊本城を総攻撃。熊本鎮台の谷干城総司令官は籠城にて応戦し踏みこたえる。博多に上陸した政府軍は鎮圧目指して次々に南進。25日には小倉からの乃木隊と政府軍本隊とが合流。薩摩軍は熊本鎮台（熊本城）を短期で陥落させることができず総攻撃をとりやめる。西郷隆盛は「加藤清正と戦って負けたようなものだ」と語ったと伝わる。薩摩軍は南下する政府軍阻止のため主力を熊本城から北上させる作戦に転換する。ここに西南戦争で最も熾烈な政府軍と薩摩軍との激戦が、熊本城の北側、肥後の北部エリアで始まることとなる（図1）。

この戦いのうち有名なのは「田原坂の戦い」であろう。その戦いの様子は、日露戦争頃には民謡「田原坂」として流行し、その後も熊本民謡として唄われ続けている。今でも「雨は降る降る神馬は濡れる　越すに越されぬ田原坂」のフレーズには覚えがある方も多かろう。さらに、小説やドラマや映画などで「田原坂」が取り上げられることも多くあり、西南戦争＝田原坂のイメージは随分と定着しているといえよう。現在の「田原坂」は国史跡に指定され「熊本市田原坂西南戦争資料館」も建つ（註2）。遺跡現地とガイダンス施設により、その戦いに生死をかけた人々の熱い息吹を感ずることができる。是非訪れていただきたい史跡である。

仙石庄之助着陣前の「山鹿口の戦い」

さて、「田原坂の戦い」と、肩を並べる激戦が「山鹿口の戦い」である。山鹿は肥後熊本と豊前小倉を結ぶ幹道「豊前街道」の宿場町で、政府軍・薩摩軍ともに重要拠点ととらえたため攻防の主戦場となった。薩摩軍は大隊長桐野利秋を山鹿へ配したことでもその重要度は明らかであろう。桐野利秋は幕末には「人斬り半次郎」と新選組もが恐れた猛将で、新政府では熊本鎮台の司令長官も務めた。西南戦争にあっても9月24日の最後の最後まで西郷と行動を共に

写真3　豊前街道山鹿宿の「八千代座」明治の薫りが残る

し、西郷の自刃後に戦死している。その桐野利秋が山鹿入りしたのは2月25日。そして翌26日には政府軍との戦いが始まり、その戦いは3月21日までの24日間続くこととなる。驚くべきことにこのひと月足らずの間に、山鹿では民権政治が行われた。これは熊本民権運動をリードした熊本協同隊が薩摩軍に同行していたことで実現しているが、駐在した薩摩軍が優勢で、山鹿の宿場町が主戦場とならなかったことも幸いした。普通選挙を行い、合議制で政を執り行なったため「日本最初の民主政治の地」ともいわれている。

山鹿では仙石庄之助が着任する以前に2度の戦闘が行われていた。どちらも薩摩軍が優勢で、特に3月3日からの二次戦では、国境の南関近くにまで政府軍を跳ね返す勢いであった。その時は、なぜか「田原坂大敗」の誤報で山鹿まで退却することとなるが、仙石庄之助が着陣するまでの山鹿での戦いは薩摩軍が優位に進めていたのである。

仙石庄之助の戦闘とその死

「山鹿口の戦い」第三次（註3）の主戦場は山鹿市街地北西部の東鍋田台地周辺で展開された。3月12日午前4時30分、北の平山からと西の西鍋田台地から政府軍は一斉に攻撃を開始する。その戦法は丘の上に据えた洋式野戦砲（四斤山砲）から砲撃を行い、その後銃撃による薩摩軍陣地への攻撃であった。指揮を執る第三旅団三浦梧楼少将にとっては初戦ではあったが、圧倒的な兵力の差もあり、一気に薩摩軍を殲滅し、山鹿に迫る意気込みであったと思われる。

ところで、明治新政府にとって西南戦争は、徴兵制を実施して編成した軍隊の最初の戦いであった。一般兵士の武器はライフル銃（スナイドル銃）と銃剣のみ。日本刀を持たないことで、サムライ時代の戦いとは違う銃火器主体の戦術が求められた。農民・商人など平民中心の政府軍隊が近代的な戦術をとることで、元武士である反乱士族集団を倒すことに新たな時代の意義があったのである。ところが、西南戦争の現実は、砲撃や銃撃の遠戦のみで決することは無理であり、最後は陣地に突入する白兵戦が求められた。薩摩軍が奇襲を多用し、積極的に白兵戦に持ち込んだ結果でもある。接近戦となれば、ライフル銃の先に装着した剣による「突く」攻撃しかできない鎮台兵（平民）を、鍛えぬかれた薩摩士族（プロの兵士）が「チェスト！」の気合とともに斬り倒すことは容易であった。そして、日本刀によるむごい殺戮を目の当たりにした平民出身の鎮台兵は瞬時におびえおののき、一目散に逃げ出す者も多かったという（註4）。そんな戦いが西南戦争前半の随所で繰り広げられたのであえる。

政府も結局、薩摩の斬り込み攻撃に対抗すべく士族である警視隊の中から「抜刀隊」を編成し、急遽田原坂の戦いに投入する。3月14日のことであった。ここに士族（元武士）が日本刀と日本刀とで戦う旧来の戦

写真4　仙石庄之助戦死の地、鍋田に建つ慰霊碑

図２　仙石庄之助戦死の地とその墓地

が、近代的な銃撃戦とあいまって展開されることとなる。西南戦争が「日本刀最後の戦い」と言われるゆえんである。

3月12日「山鹿口の戦い」第三次戦は、まさに銃火器戦と白兵戦が入り乱れた激戦となった。政府軍は薩摩軍陣地に何度も迫ったものの、陣地から抜刀して斬りかかる薩摩兵に跳ね返され、結局はひとつの陣地も落とすことができなかった。第三旅団の戦死者は133名（うち名古屋鎮台第六連隊では第一大隊長新藤俊行少佐（負傷その後戦死）はじめ41名）にのぼり、山鹿口の戦い最大の戦死者を数えた。圧倒的な兵力差がありながら薩摩軍を崩せなかった三浦第三旅団の大敗である（註5）。

仙石庄之助は早朝に始まった四斤山砲による砲撃がおさまるとともに、東鍋田の薩摩軍陣地へ向かって突撃したと思われる。当日の戦死地をみれば、鍋田68名、平山24名、城村4名の順であり、仙石庄之助が所属した第六連隊第三中隊32名の戦死者もすべてが鍋田である。仙石庄之助が突撃したそこは当日の最激戦地であった。

明治10年3月12日午後11時、政府軍は重い足取りで野営地に引き上げる。そこに仙石庄之助の姿はない。初めて参加した戦闘での戦死であった。名古屋を出発してたった3週間ほどのことである。

英霊 仙石庄之助

明治10年9月24日、西郷隆盛の死を以て西南戦争は終結する。名古屋鎮台兵も10月には名古屋に凱旋帰営した。西南戦争での戦死者は、両軍合わせて一万四千人にのぼる。愛知県から従軍した戦死者は百七十四人であった（註6）。戦死者の多くは若者で、我が国最後の内戦は尋常でない国の損害でもあった。

翌、明治11年8月から11月にかけて、明治天皇は北陸道から東海道への長い巡幸に出る。10月には愛知県を訪れ西南戦争の戦死者・負傷者へ褒賞が下賜された。仙石庄之助のご遺族も例外なく拝領したと思うが、天皇自らが近くに来られて褒賞をくださることは、平民にとってこれ以上ない厚遇であり、さぞかし畏れ多いことと感じたであろう。春日井郡ではこの行幸にあわせて盛大な西南戦争戦死者の招魂祭が三日間にわたって行われたことも記録に残っている。明治政府として、新たな徴兵制による戦いの、最良の事後処理であった。そして同年11月、名古屋城三の丸内には、西南戦争で亡くなった名古屋鎮台兵を祀る招魂社を作り、顕彰碑「戦死者之碑」を建立する。仙石庄之助の名も刻まれ、人神（その後の英霊）となるのである。戦没者の英霊化は、軍国主義国家に突き進む萌芽ともいえよう（註7）。

仙石庄之助の墓を訪ねて

平成28年4月。熊本県熊本地方を震源とする震度7の地震が襲う。多くの家屋が倒壊し、死者267名の大惨事となった。国の特別史跡熊本城の被害も甚大で、大小天守の屋

写真５　宥明堂陸軍墓地を墓参する

根瓦が崩落したうえ多くの櫓が石垣とともに倒壊・崩落した。平成29年3月ようやく落ち着きを取り戻しつつある熊本を、当ＮＰＯ法人ニワ里ねっとで訪れることにした。訪問することも支援！との思いである。その日程は3月13・14日で、見学地は熊本城、田原坂、江田船山古墳、オブサン・チブサン古墳、鍋田横穴、岩原古墳群、方保田東原遺跡、鞠智城などで、宿泊は山鹿を予定した。

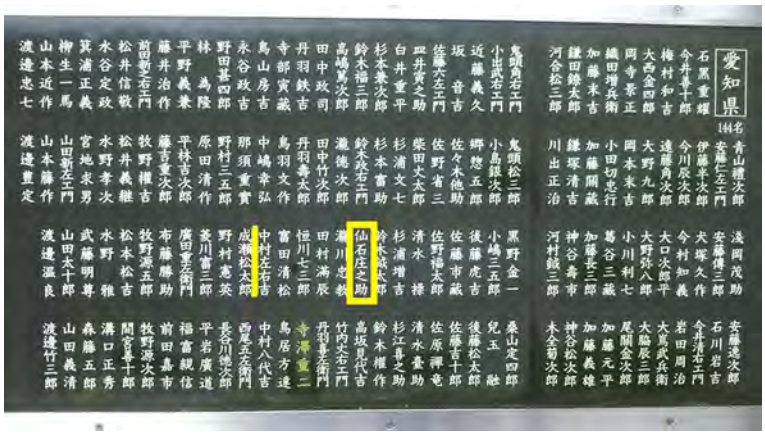
そして奇しくも、その旅行計画の最中に「栗栖の仙石庄之助、明治10年3月12日山鹿鍋田にて戦死」を知ることになったのである。百四十年前のほぼ命日に、出生地である犬山から亡くなった「山鹿市鍋田」を訪問する⁉これは仙石庄之助さんのお招きか⁉ならば是非お墓参りを！仙石さんの墓はどこだ⁉であった。さらに奇遇は重なる。西南戦争の研究者で田原坂の発掘調査や西南戦争資料館設立にもかかわった中原幹彦氏は旧知の間柄。また山鹿市には大学の後輩である宮崎歩氏がいたのである。至急に墓地の調査を依頼し、あっさりとそのお墓も知れた。山鹿市鍋田を訪問する3日前のことであった。

「宥明堂陸軍墓地」それが仙石庄之助の埋葬された墓地である。「宥明堂陸軍墓地」は山鹿市街地の西北はずれに位置し（図2）、おもに3月30日から4月10日にかけての隈府・古閑方面の官軍戦死者百五十三柱を埋葬する。墓石の調査は昭和32年より山鹿高校考古学部原口長之を代表とする城北史談会で行われていた。その成果は「山鹿郡山鹿町字宥明堂陸軍墓碑銘寫」としてまとめられ、さらに雑誌「石人」にも報告された。これらによれば、仙石庄之助の墓は、奥より手前四列目向て右列二十四基のうち十六番目に位置した。墓石は正面に「陸軍兵卒　仙石庄之助之墓」右面に「名古屋鎮台歩兵第六聯隊第一大隊第三中隊」左面に「明治十年三月十二日於熊本縣肥後国山鹿郡鍋田戦死」裏面に「愛知縣尾張国丹羽郡栗栖村　平民」と刻まれていた。ただし、調査が行われた時点ですでに多くの墓石に破損が認められ、さらに調査後も墓石を「漬物の重し、鎌とぎ等の砥石に使用されて持ち去られている」とのうわさを聞くにおよび、「せめて城北史談会、会員の手によって保存しようではありませんか」と訴えられていた（註8）。残念ながらその危惧はさらに大きな現実となってしまった。「宥明堂陸軍墓地」は昭和44年の山鹿市老人福祉センター建設時に全面的に改修され、多くの墓石が埋没・撤去されたのである。宮崎さんからの連絡も「現在、仙石庄之助さんの墓石を地上に確認することはできません」というものであった（註9）。

平成29年3月13日夕方、仙石庄之助戦死の地である山鹿市鍋田に到着。無念の死であったであろう一兵士に想いを馳せ合掌。そして翌3月14日の朝、宥明堂陸軍墓地を訪れた。やはり仙石庄之助個人の墓石はなかったが、墓地碑に刻まれた戦死者名一覧に「仙石庄之助」を認め、確かにこの地に眠られていることを確認した。尾張弁訛りの我々の会話に、

写真６　県史跡として保存されている肥猪官軍墓地と墓石（中原幹彦氏提供）

写真７　田原坂の慰霊碑に刻まれた愛知県出身戦死者名。
※仙石庄之助・成瀬松太郎箇所に印



きっと生まれ故郷栗栖を想いだしていただけたことと思う（註10）。

おわりに

現在の栗栖地区には15軒ほどの仙石姓がある。栗栖区長仙石友男氏にご協力いただき、「仙石庄之助」につながる仙石家が有るや無しやの聞き取りをしていただいた。また、栗栖地区の多くの仙石家が菩提寺としていた瑞泉寺塔頭臨渓院の宮川明道師にも過去帳を紐解いていただいた。残念ながら、どちらからも「仙石庄之助」につながる情報は得ることができなかった。現在のご子孫をたどれなかったことは少し残念でもあった。

今回、ひょんなことから遠く離れた地で亡くなった「仙石庄之助」という若者の人生をたどることになったが、あらためてひとり一人の活動や行動の積み重ね（＝人生）が、歴史を作り上げていることを実感した。地域に眠る歴史の掘り下げを、これからもできたらいいなと思う。

【註】

（1）同時に伊藤厚史氏より、多くの兵士がこの愛知県からも出兵していることを教えていただいた。また、自身の論考「愛知県人の西南戦争」をご紹介いただき、小稿でも大いに参考させていただきました。

（2）「熊本市田原坂西南戦争資料館」は2015年オープンの新しい施設で、発掘成果やジオラマもとても充実している。見学時には、日本刀を「美術品的展示」した次のコーナーで、日本刀による切り傷を生々しく描いた当時の写生図を展示。さらに次のコーナーでは日本赤十字前身「博愛社」の誕生につなげる構成となっておりとても感心した。

（3）戦いの「何次」表記については、2002年発行の『西南の役　山鹿口の戦い』に従った。

（4）民家に逃げ込んだ鎮台兵が「なんで俺は次男に生まれたんだろう」とつぶやいたエピソードが残る。戸長や嫡子は徴兵免除であった当時の不条理を如実に感じることができる。また、政府軍の兵卒には木綿小倉織の洋式軍服（写真2）が配給されたが、軍帽の鉢巻の色で鎮台兵（黄色）と、士族出身の近衛兵（緋色）と区別した。薩摩兵は近衛兵を「赤帽」と呼んでより注意を払った。

（5）作家司馬遼太郎の第三旅団司令官の三浦評は手厳しい。「少将三浦梧楼は大軍を擁しながら音をあげ、その理由は鎮台兵の弱さにあるとし、士族兵である近衛兵をしきりにほしがった。」「三浦という長州騎兵隊上がりの少将自身が薩人をよほど恐れていたのか、出来るだけ敵と直接衝突する機会をすくなくし、第二線ばかりまわっていたので、東京にまで悪い評判が聞こえたりした」司馬遼太郎『翔ぶが如く』より

（6）「一八七八年の褒章報告書によれば」との『愛知県史　通史編6』での数字。

（7）県内で「仙石庄之助」の名前が刻まれた碑としては以下がある。
・愛知県護国神社の戦死者之碑（元招魂社から移設）明治11年建立「愛知歩兵卒　仙石庄之助」
・布袋神社隣の戦死者記念碑（元犬山城西麓から移築）明治19年建立「栗栖村　千（ママ）石庄之助」
・栗栖神社の忠魂碑　大正四年建立「明治拾年於西南戦争戦死　故陸軍歩兵一等卒　仙石庄之助」

（8）堀若男「明治十年之役の両軍の墓石」より

（9）仙石庄之助と同日に鍋田にて戦死した多くは南関の「肥猪官軍墓地」に埋葬されている。「肥猪官軍墓地」は現在県史跡に指定され、墓石も状態よく保存されている（写真6）。仙石庄之助も「肥猪官軍墓地」に埋葬されていれば、その墓石も今に残ったと思うと残念でならない。また、同日に鍋田での戦死が確認できる68名のうち、宥明堂陸軍墓地に葬られたのは4名のみである。その4名ともに仙石庄之助と同じ、名古屋鎮台の第3中隊であることを思うに、本隊とは別の作戦行動により、やや離れた場所での戦死であったとも考えられようか。

（10）同日戦死4名のひとり成瀬松太郎は、尾張国苅安賀新田（現一宮市三条）出身である。仙石庄之助とともにお国訛りを懐かしんでくれたことと思う。

【参考・引用文献】

2017『愛知県史　通史編6　近代1』愛知県

堀若男　1961「明治十年之役の両軍の墓石」『石人』第二巻第七号

堀若男　1961～1962「西南の役の墓石遍歴」『石人』第二巻第八号～第三巻第二号

2002『西南の役　山鹿口の戦い』（財）山鹿市地域振興公社

司馬遼太郎　2002『翔ぶが如く（九）』新装版　文春文庫

伊藤厚史2012「愛知県人の西南戦争」『戦史考古学研究　№7』

1990『靖國神社忠魂史　西南の役』復刻版　青潮社

2011『西南戦争ガイドブック　植木・玉東』熊本市

ニワ里ねっと会員募集

会 費

賛助会員 又は 正会員

個人・団体：１口　3,000 円

* 賛助会員（目的に賛同し援助するために入会した個人および団体）
** 正会員は「総会」への出席をお願いいたします。

会員特典

1．会員証の発行（裏面はスタンプカードになっています）
　イベントにご参加いただいてスタンプを集めると記念品を贈呈
2．会報「さとの四季だより」を年６回（隔月）お届け
3．ニワ里ねっと企画に会員料金でご参加
4．木之下城伝承館・堀部邸の優先利用権
　（座敷等半日無料利用権２回・貸切利用権１回）
5．研究紀要「遷波」を希望者に贈呈

入会申込の流れ

会員期間：５月の総会から翌年５月総会までの１年間

1）青塚古墳ガイダンス施設、あるいは木之下城伝承館・堀部邸の窓口で受付
　申込書に必要事項をご記入いただき、年会費を添えてお申し込みください。

2）お振込（郵便振替口座）による受付
　新規会員様は通信欄に「新規賛助会員費」又は「新規会員費」、住所・氏名等をご明記ください。振込確認後、ご住所に会員証などを送付いたします。

【郵便振替口座】
口座番号　00850-9-198552
口座名称（漢字）　特定非営利活動法人　古代遷波の里・文化遺産ネットワーク
口座名称（カナ）　トクヒ）コダイニワノサト　ブンカイサンネットワーク

上記口座にて、寄付金も受付けております。
ニワ里ねっとの活動へのご支援をお願い申し上げます。

ニワ里ねっとの活動に参加いただける方、
ご支援していただける方を広く募集しています。
私たちと一緒に文化遺産を活かした
まちづくり活動に参加してみませんか？

イラスト（山本彩乃）

NPO 法人
古代邇波（にわ）の里・
文化遺産ネットワーク
（ニワ里ねっと）

木之下城伝承館・堀部邸
（NPO 事務所）
〒 484-0084
犬山市大字犬山字南古券 272
TEL:0568-90-3744
FAX:0568-90-3743

青塚古墳史跡公園
ガイダンス施設
〒 484-0945
犬山市字青塚 22-3
TEL:0568-68-2272

《ニワ里ねっと HP》
http://niwasato.net/home

《木之下城伝承館・堀部邸 HP》
http://horibetei.com

《FB》https://www.facebook.com/niwasatonet/
《twitter》https://twitter.com/niwasatonet

研究紀要　第７号

niwa 邇波

《編集・発行》
NPO 法人
古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
（ニワ里ねっと）

《写真》
中野 耕司、ニワ里ねっと事務局

《発行日》
令和２年５月１６日

表紙写真 / 中野 耕司